

## I はじめに

分科会基調では、誰も排除されず、居場所や役割があり、住民一人一人が自らの存在と人権が守られ、生きがいを実感できる生活をつくり出すまちづくり「人権確立をめざすまちづくり」をどう進めていくかについて論議することを確認した。その中で、地域に存在する差別の現実についての確認がなされた。わたしたちは感染症であるハンセン病について大きな過ちを犯した歴史がある。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、自分の身に何らかの影響が及ぶとなれば、差別する側に身を置いてしまう実態が明らかになっている。これは人権教育や啓発活動の取組の弱さや不十分さを露呈していると言わざるを得ない。そこで、すべての人が安心して幸せに生きることのできる社会づくりが喫緊の課題となっている。社会教育の取組では「居場所」「仲間のいる場所」だけでなく「役割を見出す場所」「人権を学ぶ場所」があることも大切であると提案し、最後に討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

## II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—④ 「子ども未来教室」で宿題しませんか？  
(三重県人教)

—主な質疑と意見—

**大阪** 「しまふれあい人権フォーラム」について具体的に知りたい。また、子どもたちの取組から、報告者が感じたことや変化したことを教えてほしい。

**報告者** 人権作文の執筆を授業の中で取り入れており、例年12月にフォーラムにて代表の作文を発表してもらっている。発表後に子どもたちの意見交流があり、子どもたち自身の思いや感想を出し合っている。これに参加する中で、子どもたちは自分自身に向き合っているが、自分にはそれ

ができていないのではないかと思うようになった。そこで、今回自分の立ち位置について振り返りたいと思うようになった。

**奈良** 「子ども未来教室」の立ち上げについて知りたい。

**報告者** 行政主導であった。その背景として「全国学力・学習状況調査」の結果があまりよくなかったというのがある。また、地域住民との話し合いの中で、学力保障の支援ができないかという意見が出されたのがきっかけとなっている。

**鹿児島** この取組はどのような学習会をモデルとしているのか。

**報告者** 志摩市の教育集会所で長年取組んでいる学習会では、学習支援員と子どもたちの距離がとてに近い。そういった雰囲気を取り入れていけたら良いという望みがあった。

**奈良** この教室に参加するということは、「家が貧しい」という状況を明らかにすることにつながると思うが、どのように対処しているのか。

**報告者** 募集の条件として、誰でも参加できるようにしているため、家庭的にしんどい状況の子どもたちだけが参加しているわけでない。だから、この教室に参加しているからといって周囲から特別視されることはない。

**鹿児島** 全国学力・学習状況調査に対する信憑性がないと考えているため、これをきっかりとして取組が始まったということに疑問を感じる。

**愛媛** 鹿児島の意見と同様に、子どもたちが将来のために身に着けていく学力とは、点数のための学力ではない。子どもたちに必要な差別に打ち勝つための学力をどのように捉えているのか。

**報告者** この取組を始めるための基準の一つとして国主導で実施している学力検査の結果を参考にした。しかし教科の勉強だけができれば良いというわけではなく、自主的に行動したりあいさつができたりという、人との関係構築の力をつけてほしいと考えている。

—報告2—③ 「識字・水平社100年宣言」から考える識字運動のこれから

(大阪市人教)  
—主な質疑と意見—

**奈良** 大阪市の被差別部落の識字の状況と、日之

出よみかき教室についてももう少し詳しく教えてほしい。

**報告者** 大阪市内では現在実質的に隣保館は0である。公立の隣保館は無くなったということ。これは隣保館の位置づけがなくなったというだけでなく、建物自体が更地になったということ。青少年施設も高齢者施設もすべてなくなっている。識字に限っては2000年くらいまでは大阪市から社会教育主事が隣保館に2人ずついて、そのうち一人は識字の担当だった。その人たちは識字があったら毎週その会場に来て関わっていた。しかし21世紀に入ってからどんどん後退していった建物もなくすということになった。しかし識字学級が連携して運動し「識字の場所は確保する」ということを約束させた。そこで小学校や中学校の教室を借りて実施できるようになった。ほかには民間の隣保館でやっているところもある。現在大阪市の社会教育の担当者が識字に来るということはほぼ0である。ボランティアがすべて運営している。教材費は年間1万円ちょっとある。

次に日之出の教室について。現在学習者は10人くらい、ボランティアは4人くらいでやっている。いろんな人たちとつながり合いながら運営しようとしている。20数年前までは、地域の方たちが参加していたが、少なくなっていく。検定試験をどうしてもとりたいたいという希望の方もいるが、生活に根差した学習をしようという目的があるため検定のための勉強は応援しないことにしている。識字と言うと文字の読み書きをする場所と言うイメージがあるが、今は人権学習を軸に据えて教室を組み立てることが求められていると思う。

**福岡** 学習者の学びたい内容が多様化してきていると思うが、普段の識字学級でどんな学習をしているのか教えてほしい。

**報告者** 例えば、ニュースで出てくる言葉がわからないという学習者が教室で質問してボランティアが答えている。また、いつもおしゃべりを大切にしている。おしゃべりの中で、「行政や学校から届く文書がわかりにくい」といった声があり、文書が伝えたい内容について一緒に考えている。そもそも学校の文書がわかりにくいという点に

課題があるため学校側にも働きかけている。行政から届くワクチン接種にかかわる文書も分かりづらいため学習者と一緒に理解しながら、行政への働きかけもしている。また、大事にしているのは日記である。日記を書いてもらって教室で発表し、それをもとにみんなで話し合っている。さらに、誰かひとりが課題を抱えていたら、それをその人だけの課題にせず、みんなの課題にすることを大切にしている。お互いが、教える人であり同時に教わる人であるというようにするのが良いと思う。

#### — 1日め 総括討論 —

**大阪** 今、解放運動にとって最も大事なものは、部落をどう名乗るのか、どう明かしていくのかという点である。しかし、現在は逆行していると思う。100年前は、堂々と部落を名乗っていた。しかし100年後のわたしたちは、隠してしまっている。部落問題に向き合うには部落を名乗るのがとても大事だと思う。そこで識字に関わっている方たちは、このような課題についてどのように捉えているのか聞きたい。

**報告者 (大阪)** わたしの周りには、部落を名乗るのをためらわない人の方が多いと感じる。抵抗を強く持っているのは、学校の教員に多いと思う。教員は「部落問題学習ができません。なぜなら、子どもたちに『どこが部落か』と聞かれたら答えようがないから」と言う。ここに一番の問題があると思う。これに対してわたしが関わっている支部長は「そんなことはどうでもいい。うちの地区に来てくれたらいい」と話した。だからもし、教員が子どもたちに聞かれたら「だったら先生と一緒にいこうか」と言えたらいい。でもそのためには、教員が地域の人たちと信頼関係のもとに結びついているかにかかっている。でも1年め2年め教員には難しい。そうなる管理職の出番となる。「校長先生が知っているから、校長先生と行こう。その時は先生も一緒に行くから」と返す。その後、友達や家族に広げて行けば、学習が深まる可能性がある。

**島根** 「部落をなぜ隠すのか」という問いかけが胸に突き刺さった。確かに、子どもたちに聞かれたら答えられないと思う。自分が話すことによっ

ていじめや差別を助長してしまうのではないかと不安になる。自分自身は、大学生のとき友達に「あの地域に近づかない方がいいで。あそこ部落やから」と言われたとき、初めて、今も部落差別はあるし、差別する人がこんなに近くにいるんだと衝撃を受けた。奈良で教員をしていたときに、そこで出会った先生のおかげで部落に対するイメージがとても良くなった。だから、子どもたちにはそんな経験をさせないといけないと思うようになった。だから大阪の報告のように、識字だけでなくいろんな活動を通して、いろんな人に知ってもらおう。自分たちも周りを知っていくというのが大事と思う。まずは、学校で系統立てて部落と何なのか、どうやって教えていくのかを整理しないとけない。

**広島** 示現舎の問題について。水平社宣言の「エタであることを誇りうる時がきた」を逆手にとった差別活動をしている。差別を受けるといのは、カミングアウトしていてもしていなくても一緒である。裁判（一審）では、一生懸命解放運動をしている人は、すでにみんなが知っているのだから差別にならないというような判決になった。これは許せないと思う。自分が部落の人間であることを明かされることによって、不利になる身内や友達がいるという実態があるから許せない。そういうことだ。

**福岡** 最初6年生に部落問題を教えたときにとっても緊張した。でも、子どもたちは意欲的に学んでくれた。この子たちと一緒に学んでいきたいと思った。2年生と6年生で隣保館の見学がある。子どもたちが「先生たちが隣保館に行っているのを見たよ」と話しかけて来ることがある。そのときに「先生たちも学びに行っているのだよ」と答えている。わたしはまだ「地域に一緒に行こう」とは言えない。でも、子どもたちと一緒に学んでいくという姿勢をこれからも大事にしていきたい。

**三重** 志摩市では、小学6年生が「出会い学習」として地区に来て学んでいる。志摩市は出会い学習がある環境が当然だから、今までは感じていなかったが、「地区のことをなかなか言えない」というような意見をここで聞いて、出会い学習ができ

るということはあるがたいことなのだ」と感謝の気持ちをもった。

**報告者（大阪）** わたしたちの識字教室で部落問題学習をしようとしたら、歴史からしっかり学ぶのは大変だとなった。だから、まずは出会ってもらおうとしている。地域の人で活動している方を呼んで話をしてもらった。その方が家族が受けた差別について話してくれた。するとベトナムの学習者が、自分たちの地域にも少数民族に対する差別があると話してくれて、差別の問題の重なりを見つけて学ぶことができた。

**報告者（大阪）** 2002年の法切れから、運動が劣勢に立たされてきた。2002年のすぐ後に「本物が誰なのか分かるだけ。これからやる人が本物で、これでやめる人は偽物。法切れは怖くない」と分かりやすく語った人がいた。厳しい状況の中で、ここ20年くらい歴史学習を基本にしながら部落問題学習を進めてきた。なぜなら教科書に出ているから。2016年の新しい法律ができてからは、今ある問題を取り上げて部落外の間人がきちんと学ぶのが基本と思う。識字も同じで、今通っている学習者が元気になるような学習を組み立てられるように常々考えながらやっている。

大阪 全同教に対する質問がある。1975年以前のレポートは地域名が出ていたらそのままにしていた。ところが地名総監が出た後、1978年ごろからはすべてイニシャルになった。なぜだろうと思って報告者に聞いたら、レポートを事務局に出したらイニシャルに変えられたらしい。しかし3年くらい前のおそらく島根大会からイニシャルがなくなった。この変遷について理由を答える説明責任が全同教にはあると思う。また、地域の解放同盟で活動している人たちと、地域名を出すのはどうなのか語ってほしい。これをしないと学校の先生たちは、部落問題学習はやりにくいし前に進まないと思う。

#### 一日めのまとめ

「むなつき坂」をどう捉えるかは、位置によるのだと思う。部落から遠くにいる人たちは、部落ってこわいな。小学校の6年生の担任でなくて良かったな。という「むなつき坂」であろう。しかし、部落に思いを寄せる人たちの「むなつき坂」

は、部落の地域の人たちのことを思うと足が進まないということになる。

水平社宣言「男らしき殉教者」の部分を問題視して「これはけしからん」と言う人はほとんどいないと思う。宣言の大事なところはそこではないと理解しているからである。

明日は「むなつき坂」でいえば、人々がどの位置に立つのか、立てるのか、そのための活動・啓発についてつないでいけたら良いと思う。

### —報告3—① 文字はずうっと心の中で光っています ～「識字」53年の学び～

(奈良県人教)

#### —主な質疑と意見—

**兵庫** 小学校への講演活動で出た子どもたちの感想を紹介してほしい。

**報告者** 「自分から進んで学校に行くことの大切さがわかった。」とか「大切な言葉を教えてくれてありがとうございました」とか。

**大阪** 学習を応援してくれている娘さんとのエピソードを教えてください。また、報告者にとっての識字とは何か教えてください。

**報告者サポーター** 娘さんも識字の活動を一緒に楽しんでいる。月に1～2回報告者に会いに行くと、娘さんはよくしゃべってくれる。また、読んでいる本を紹介してくれる。

**報告者** 本当に文字は楽しい。漢字ほど意味深い文字はない。文字がなければ生活ができないということが身に染みて一文字一文字を大切に読みながら頑張っている。

**奈良** 奈良県の識字の状況を伝える。奈良には21の識字学級がある。3つの公立中学校に夜間学級がある。自主夜間中学も3つある。最近いろいろな国にルーツのある人が集まってきている。あるいは文字を奪われて生きてきた青年たちも参加している。コロナ禍になってなかなか運営が厳しいが、それでも取組をつなげていこうと、2年前に「識字の樹」という活動を始めた。学級生に書いていただいた文字を張り付けている。12月17日の交流会でお披露めしたいと考えている。

**奈良** 自分の識字学級について紹介する。学級生たちはいつも熱心に参加してくださっている。そんな場所と時間を提供できる価値を、学級生の姿

を見ることで教えてもらっている。コロナウイルス感染症拡大によって、学級が休みになり、学級生はがっかりしたと思う。しかし先生が一軒一軒、学級生の家を訪問して宿題を配っていた。学級生からは「自分の名前を書けるのがうれしいねん」と話していた。そのうち「いつになったら再開するのか」「先生にいつ会えるのかな」と話す人が出てきた。教室が一部再開したときは、学級生はとても喜んでいて。やはり直接先生に見てほしいのだと分かった。

**奈良** 大和郡山市では、毎年夏に新任転任の教員へ報告者から講話をしてもらっている。また、今年は10年未満の市職員に対して文字の大切さ楽しさをお話してもらおう予定だ。

### —報告4—② 「全国水平社宣言」創立100年 ～識字は宝島～

(高知県人教)

#### —主な質疑と意見—

**大阪** 地域の学校との交流は、どのようなつながりがあるって実施できているのか。もう一つは報告者にとっての識字とは何か一言で教えてください。

**報告者** 法切れの前から引き継いできた。地域のある学校からもない学校からもお願いがあって交流に行っている。交流実施のきっかけは、学校の教員の方から話や、先生たちの口コミで広がっている。地域のない学校では、子どもたちの夢や将来について考えてもらい、人としての学習をしてほしいと話している。地域のある学校では、自分の被差別体験について話している。わたしにとっての識字とは「生きるため」「理想を追求するため」である。そして先輩たちに対する礼儀として、識字を命ある限り続けていこうと思っている。

**愛媛** わたしの地元では外国人のために識字学級が始まった。最近、参加者が減ってきているのだが、報告者の学級ではどのように工夫しているか。

**報告者** かつて外国人の学習者もいたが、今はない。その方たちのきっかけは「学校からの便りが読みたい」とか「自分たちの文化を知ってほしい」というものだった。その後、学校の便りが読めるようになって、学級をやめていった。

**大阪** 海外からの学習者や地域外の学習者が増

えてきた理由を、もう少し詳しく教えてほしい。報告者 市民会館の館長が努力してくれている。同じ施設内でデイサービスに通っている人たちがいて、その人たちに館長が声をかけてくれて参加するようになった方がいる。やはり館長の考え方ひとつでみんなが意欲的に参加できるようになり、その中で地域を知ってもらえるようにしていきたい。

## —2日め 総括討論—

**大阪** 1点目。「おかしい」ということを言える力は識字ではとても大切だと思う。2点目。外国人に対して学級を開いてもなかなか集まらないというのがある。それは外国人のやる気の問題にされがちだが、自分はそう思わない。ビザの関係とか厳しい労働環境の中で働いていることを考えると通いたくても通えない状況がある。だから通いやすい時間帯を考えるなど様々な工夫をしていきたいと思う。

**奈良** 以前識字学級に行っていた。教室の後ろで学習者を眺めていただけだが、学習者が魂を込めるように文字を書く姿を見て、形の整っている文字だけが美しいのではないと教えてもらった。昨年、部落史について学ぶ場に行って話をした。その時、学級生に「そんなの知らなかった」とか「これまで、何も悪いことしていないのに何か引けめを感じながら生きてきた。今日の話聞いてなんかすっとした」と言われて、これまで活動を続けてきてよかったと思った。ぜひいろいろな場所で部落史について学ぶ場を提供してほしいと思う。

**大阪** 部落差別は40年、50年前から大分変わっているが、われわれはそれに対応できているのだろうか。2002年以前は、レポートが一つの分科会で10から20本は出ていた。その多くは被差別部落の活動であったり、地域の人たちが何に向かって取組んでいたのかといったりするテーマが8割くらいだった。ところが2003年になると10本くらいに減り、しかも被差別部落の地域の活動についての報告は0だった。なぜだろうと考えた。多分、法切れ前までは行政が神輿を作ってくれていて、それに乗っていただけだったのだろう。その後、神輿がなくなって、自主的な報告がなくなったのだと思う。行政の限界は何かというと、今

起きている差別について話せないというところだろう。先生と学習者が対等な立場になってしゃべりあって学びを深める。これが識字の力だと思う。この中で、今の部落差別にはこんなことがあるよということが話題にならなければならないと思う。このような学びの中で初めて部落差別と自分との関係が明らかになるのだと思う。行政の人たちも常に部落差別の現実とは何なのかについて部落の人たちと語り合わなければならないと思う。

**大阪** 大阪市内の識字では、学校の教員や行政の職員がくるところはない。ボランティアが支えている。そんな中で、識字をどのように進めているのか理解してもらえたら良い。例えば、生まれ育った地域の識字はどのようになっているのか、どんな人たちが参加しているか、誰が支えているのか、そんなところについて。

**三重** 自分の務める中学校には部落があるのだが、いまだに「その地区の子とは遊ぶな」といった差別事象が起こっている。それは、家庭の祖父母から受け継がれるような形で言われてくる。それに対して、言われた子どもが悩んでいるという事象があった。一方、「おじいちゃん、おばあちゃんが言っていることはおかしくないか」と返せる子どもも増えてきている。それは小学校からの積み上げがあるし、差別事象があったら、校区で出し合って話し合っているからだと思う。学校に通っている地区の子どもたちは小学校のときに自分の地区が部落であることを学んでいる。しかし、中学校で部落問題学習が始まったとき、初めて部落差別を学んだ子どもたちが「どこに部落があるの」と聞くことがある。その時に子どもたちがどのように返していくのかを学ぶための場所が必要となり、教育集会所で学習する場を設けている。そこで子どもたちは「なんでそんなこと聞くの」と返すようにしている。だが、「どこに部落があるの」の質問に対して、かわしたり、スルーしたりするしかない子どもたちもいる。こういう子どもたちが、中学を卒業して差別に出合うときに頼りにするのは集会所で地区の人たちである。だから、学校からの発信も大事だし、地区との連携・

協力が欠かせないと思う。一生つながれる場所があるというのは、生きていく上でなんと心強いかと思うので、識字の学びの場も途絶えることなく残して行ってほしい。

**福井** 部落が自分の周りにはない環境に生きてきており、部落について自分も子どもたちも知らないというのはとても危険だと思った。小学校で部落の歴史について授業すると「みんなのために働いている人たちが何で差別されるのか」という感想を言ってくる。今もその子孫が差別を受けていると教えるとすごく驚く。しかし、この程度の授業ではとても甘いとこの2日間学んで気づかされた。子どもたちにとっては、交流がとても大切だと思う。これから、子どもたちにどのようなことを教えていけばよいのか教えてほしい。

**奈良** 子どもたちに学ばせたり、出合わせたりする前に、先生自身がどのように学んだり出合ったりするのが大切だと思う。教師自身が出合っていない中で、何を子どもたちに伝えられるのかと思う。まずは、自分がどう出合っただう変わっていくのかを大切にしてほしい。

**高知** 人権教育でいちばん変わることができるのは指導者側の考えと態度である。部落問題をどう捉えどう行動していくか、教師自身の問題としてほしいと思う。

**大阪** 人権問題にかかわる人にとって「出合う」というのはとても大切だと思う。しかし近くに地域がないなど、直接出合えない場合もある。そういうときは自分自身の生い立ちを振り返るという方法がある。「全国水平社 100 年宣言」を進めているときに同和教育実践を長年してきた人でも「自分は書けることが何もない」という人がいる。そこで「だったら、あなたの加害性について書いてみませんか」と提案してもなかなか書けなかった。一方教員の中にも、自分の加害性などの思いを書ける人もいる。三重の報告にも子どもたちは、いじめでの自分の加害性などについてつぶっていると聞いた。これはとても大事で識字運動にも通じる。直接出合える環境にいるならば、ぜひとも出合う機会をつくってほしいが、そうでなければ、自分の思いを書くようにしてほしい。

**三重** 集会所事業では、小学校高学年で立場の自

覚を進めている。「自分の立場を学校で話したい」と言う子どもに対してその理由を問うてみると、先輩の中学生や高校生との縦のつながりの影響が大きいと分かる。人権フォーラムで発表する機会が予定されていた地区の子どもに何をいちばん伝えたいか訊くと、地域のない学校と一緒に部落問題をなくすために学ぶのが大事だと伝えたいと言っていた。自分も地域のない場所でもどれくらい学習を深めていけるかが大切だと思っている。高校生くらいの子どもの地域についてどう伝えるか話題になるときは「いちばん大切な人に、伝えたいときに伝えられるのが良いのではないか」と話している。

**福岡** 「教師が部落問題学習から逃げている」という意見に関して、印象的なことを言われたことがある。ある人が「部落を訪れる教員は増えた。だが、部落が遠くなったのではないか」と話した。確かに部落で開く研修に参加する教員は多い。しかし地区の人たちと親しくしたり、自分について語れたりする教員はそんなにいない。人権のまちづくりの原点は、部落の子どもたちが自分たちについて語れる、そしてそれを受け止められるというものだと思う。近年若い先生が増えてきているが、この人たちに、地区の人たちと長年活動してきた先輩教員の話聞いてもらっている。部落の人たちと関わって、その人生の豊かさや温かさを子どもたちに伝えていきたい。出会いによって心動かされた体験を子どもたちと共有していくのが、差別のない世の中をつくっていく一歩になると思うから、このことをこれからも伝えていきたいし、もっと学んでいきたい。

## 2 日間のまとめ

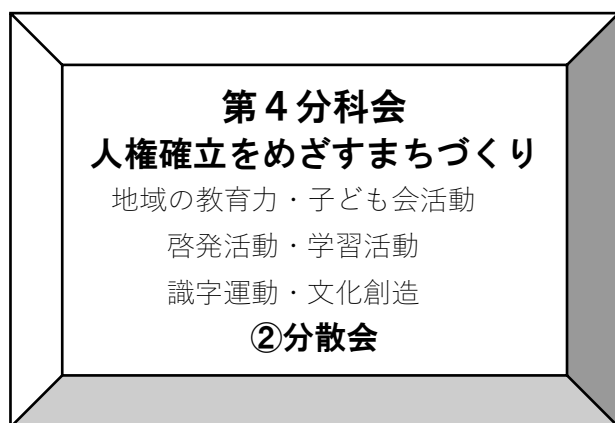
三重の報告について。小中学校で人権教育が完結するわけでない。差別社会に放り出された子どもたちを改めて人権の学びに呼び戻すために、地域の中に子どもたちを支える場所をつくる必要があるということを確かめられたと思う。

大阪の報告について。差別事件を契機に識字運動をもう一度見直そうという取組が報告された。識字の課題を克服するためのアプローチの一つを示してもらえた。

奈良・高知の報告について。識字運動によって、

地域の子どもたちや他地域の子どもたちと交流することで、地域住民の交流や啓発につながっていることが示されて、あらためて水平社宣言のすばらしさを学ぶことができた。

「学力」の捉え方について。文字を書けるとか計算できることは悪いことでない。その意味で受験学力を否定することはできないが、受験学力があれば差別はなくなるのかということが問題である。つまり学力が本当に差別をなくすことにつながっているのかについて考えていかなければならないだろう。同様にカミングアウトについても、自分の出自を明らかにすることが、差別をなくすことにつながるのであれば、カミングアウトするだろうし、逆に差別を強める可能性の方が高いのであれば逃げるのではなく、かわすという方法もある。また、教員が差別の問題に向き合っていないのではないかという指摘もあった。自分の被差別・加差別体験について一緒に書こうとしているときに「自分は何も書くことがない」と言っているようでは、いくら子どもたちの前で人権の大切さを説いても被差別の立場には立ち切れないだろう。人権のまちづくりとは、「自分は差別について詳しく知っています」とか「差別をしません」とかでなく、「自分は差別の問題に向き合い続けます」と言える人々を増やしていくことにほかならない。



#### I はじめに

全体で討議課題・討議の柱を確認し、報告・討論を行った。

#### II 報告及び質疑討論の概要

##### 一報告1ー⑧

##### 公私協働でつくる虐待ゼロのまちづくり

～いつでも どこでも みんなで子育て～

(大阪市人教)

一主な質疑と意見一

**鳥取** 子どもの権利条約を条例化すべきとのことだが、具体的なイメージがあれば。

**報告者** 条例づくりの根幹は子どもの声を聴くこと。しかし、聴きっぱなしで終わってはいけない。過去の失敗を糧に、社会や行政にどのように届けるべきかをネットワークを通じて問い続けている。

**徳島** 虐待に至った保護者にマイツリーペアレンツプログラムを受けさせることは容易ではないと思うが、どのようなアプローチを行っているのか。

**報告者** プログラムにつながった一例を紹介。当事者の声を聴くことを念頭に、同じ目線で繰り返し面談を重ねたことで受け入れてもらえたと感じている。

**徳島** 特定の家族に対する特別の支援は公平性に欠けるという声をどう思うか。

**報告者** 大切なことは、その人に応じたオーダーメイドの支援を行うこと。その支援を応用してフレーム化し、制度を構築していかなければいけないと考える。

**奈良** 効果的なケース会議を行うために大切なことは。

**報告者** まず支援者どうしの「顔の見える関係性」をつくり、学校の中にケース会議を定着させること。

**高知** 支援が必要な人に情報を届けるためには、どのような取り組みをすればよいか。

**報告者** 情報提供を自己満足に終わらせないためには、大多数にあわせるのか、少数派と呼ばれる課題に着目するのか、その視点を大切にしなければいけないと考える。

**大阪** 効果的な不登校支援のあり方について具体的に。

**報告者** 難しい問題だが、不登校の居場所づくりは地域の中で取り組むことができる。また、不登校の背景には様々な人生の変遷があると思うので、幼少期から高校まで切れ目のない情報共有が重要と考える。

—報告2—⑦

武庫東小学校育友会における人権啓発活動の取組

(兵庫県人教)

—主な質疑と意見—

**兵庫** 保護者を対象とした学習会で学んだことを、たんぽぽの綿毛のように地域に広げているという実感はあるか。

**報告者** 実感はないが、学ぶ人が増えることで、その地域の人権感覚が豊かになると思う。

**徳島** 学習会に参加者を集めるために工夫していることは。

**報告者** ニーズにあわせて、自分たちで学習計画を立てている。

**高知** 学習会への教員のかかわり方は。

**報告者** 授業の時間帯なので教員の参加はないが、学習会の準備には協力を得ている。

**佐賀** 学習会が40年以上継続している理由をどう考察するか。

**報告者** 数年前に育友会(P T A)離れが危惧されたが、負担を軽減するなど見直しを行い乗り越えた。学習会でも同様に、継続へ向けた先輩方の努力があったと思う。

**徳島** 地元で45年前に始まったP T A人権のゆうべが、現在もかたちを変えて続いている。あ のとき取り組んでいなかったら今はない。続けることは難しいが、まずは取り組むことが大切だと思う。

—報告3—⑤

子どもの居場所づくりをめざして

(奈良県人教)

—主な質疑と意見—

**三重** 解放運動から地域住民主体のまちづくりに転換していく取り組みの中で、周辺地域住民とはどのようなかかわりがあったか。

**報告者** ネットワークづくりに始まり、高齢者給食サービス、子ども食堂に至るまで、周辺地域の様々な団体との協働で取り組みを進めてきている。

**兵庫** 自分たちが住んでいる地域が被差別部落であることを、子どもたちにどのように伝えているか。

**報告者** 私自身もどのように伝えるべきか悩ん

でおり、地域の共通の課題である。

**報告者サポーター** 子どもに部落問題を教えるということは、親の判断が必要なデリケートな問題であり、これを促したいという思いから、地域の歴史をまとめた冊子を作成し全戸に配布した。配付後の取り組みはこれからだが、感想を聞きながら部落問題との向き合い方を考える場をつくりたい。また、地域アイデンティティを子どもに伝えるのは地域の役割だと思うので、部落問題についても、地域が主体となって子どもたちに伝えることができる体制をつくっていきたい。

**奈良** 部落差別を子どもに伝えるにあたっては、部落に住んでいないムラの子もいるということ念頭に組み込んでいく必要があると考える。

**大阪** 不登校の子どもは子ども食堂に参加できているか。また、子ども食堂への参加を通じて不登校が改善されたケースがあれば。

**報告者** 不登校の子どもは子ども食堂にも参加できていない。今後の課題の一つ。

**報告者サポーター** 子どもの居場所は、学校とは切り離れた「地域」にあるべきと思っている。しんどい子どもの子ども食堂への参加状況も地域で把握している。

**大阪** 居場所は第3の場所であるべき。第1が家庭、第2が学校だとすると、居場所となるべき第3の場所は地域の他にはあり得ない。

**高知** 報告の中で、コロナ禍では子ども食堂の重要性が増すとあるが、具体的にどういうことか。

**報告者** 長期休校中は人と会う機会がないことから、子どもたちの居場所が必要と判断し、感染対策を講じて子ども食堂を開設してきた。

**高知** 子どもたちとの交流の中で、心の声が聞こえたエピソードなどがあれば。

**報告者** 小学校友の会でメッセージを送ってることがある。深く聴くことはせずに寄り添うことを心掛けている。

—報告4—⑥

みんな なかま てとてをつなごう

～朝倉三町子ども会2021年度の活動より～

—主な質疑と意見—

**奈良** 児童館での子ども会活動は、地域の子もただけを対象としているのか、周辺地域も含め



て対象としているのか。

**報告者** 小中学校区のすべての子どもたちを対象としている。

**奈良** 地域の神社の清掃活動を通して世代間交流も進めているとのことだが、差別の歴史や差別と闘ってきた先人たちの力強い取り組みを、子どもたちにどのように伝えているか。

**報告者** 地域の高齢者に、参拝を巡る被差別体験、それを乗り越えて地域で神社を建立した当時の思いを語ってもらい清掃活動を行っている。

**奈良** 高知から始まった教科書無償配布実現の取り組みについて、子どもたちにどのようなかたちで継承しているか。

**報告者** 運動が始まった長浜の児童館では、毎年学習会が行われている。朝倉児童館でも今後の具体的な取り組みを計画している。

**高知** 高知市の小中学校では、新年度の教科書配付の後に学習会が行われている。

**奈良** 報告の中で、児童館に来館する子どもの中には様々な生活課題を抱えている子どもたちも多いとあるが、具体的にはどのようなことか。また、そのような家庭をどのような支援で見守っているのか。

**報告者** 場面緘黙で言葉を発することが困難な子どもと、交換ノートを通じてつながることができた例を紹介。児童館にできる支援は限られているが、子どもを取り巻く学校、家庭、地域がワンチームになれるよう、些細なことでも情報共有を心掛けている。

**愛知** 報告の中で、支援が特別扱いでないことを理解してもらうことが難しかったとあるが、難しいままで終わったのか、それとも理解してもらえたのか。

**報告者** 誰もが自分を認めてほしいと思っていることを、子どもとのつながりから学ばせてもらった。支援が必要な子どもに意識が向いてしまいがちになるが、全員に同じまなざしを向けることができるよう、指導員全員で思いを共有し実践に務めている。

### Ⅲ 総括討論

「ネットワークづくり」「子どもの居場所づくり」に軸足を置いた討議を行った。主な発言内容は次

のとおり。

**協力者** 子どもの居場所づくりは、大人の居場所づくりとも重なっている。

**高知** ずっと側にいてくれる人の存在は大きい。キーパーソンは人である。

**協力者** まさに、人づくりはまちづくり。

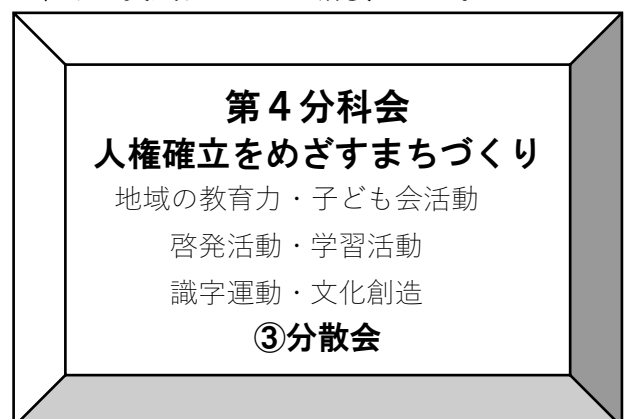
**三重** 4本の報告に共通しているのは、子どもの育ちを継続して見守っていること。

**奈良** まちづくりとは、地域に根差す人をつくるための人とのつながりのことであり、継続とは、同じ熱意を持った人を次の世代につないでいく取り組みのことだと感じた。

**報告者(大阪)** 厳しい状況にあるほどSOSを出すことが難しい。居場所の必要性が問われる根幹には排除の問題がある。違いを隔たりではなく、喜びとして認めあえる社会の実現を目指して活動を続けていきたい。

**報告者(高知)** SOSを自傷行為でしか表現できなかった子どもとのつながりを通じて、児童館が心のよりどころになっていることを感じた。大切なのは、寄り添うことと、見捨てないことだと思う。

**協力者** 私たちは課題意識を共有する力を持っている。一人ではない、だから、つながることができる。つながることで、力を発揮し、継続していける。大きな構想でなくてよい。一人ひとりが4つの報告を持ち帰り、いまできることを探し、いまできることをつなぎ、点を線に変えていく取り組みを実践することが肝要である。



#### I はじめに

分科会「討議課題」を共通確認した後、当分散会では「人権問題の解決をめざして、各所と連携しながら、どのように啓発・学習活動を展開しながらまちづくりにつなげていくのか」「地域の文

化の豊かさを掘り起こし引き継いできたかを交流し、生活の中にある自信や誇りをどのように見出し、自分とつなげてきたか」「すべての人が生きやすい社会をめざす取り組みをどう広げていったか」をキーワードとして、人権確立をめざすまちづくりについて明らかにしていくことを提起し、報告・討論に入った。

## II 報告及び質疑討論の概要

### — 報告 1—⑩

<sup>つながり</sup>縁を「つむぎ」まちをかえる (香川県同教)

#### — 主な質疑と意見—

**兵庫** 「しゃべり場」に参加した中学生が、「自分だけの問題でなく、自分は自分でいいんだ」ということで、自己肯定感が高まっているが学校との関係や連携についてはどういう取り組みがあったのか。もう一つは、パートナーシップ宣誓制度の導入にあたって、この「しゃべり場」の取り組みが、行政としての導入につながったのかを、もう少し具体的に聞かせていただきたい。

**報告者** 学校と取り組みについては、直接的な学校の連携ができてないと感じている。また、次の「しゃべり場」では、学校等に案内チラシを配布して、生徒や保護者の参加をえることができた。パートナーシップとどういうふうにつながったのかということですが、2017年頃からLGBTQの当事者の方々を呼んで、講演会等を行ってきた。周辺他市の状況もありまして、パートナーシップ宣誓制度を導入していかなければいけないとなっていたところで、あゆみさんとの出会いがあり、その後の取り組みを進めていく中で、意見をお伺いする中で、当事者に寄り添うという意味でもパートナーシップ宣誓制度に取り組みました。

**兵庫** 「自分は自分でいいんだ」と自信をもった中学生の学校の中で様子はわかりますか。

《報告者》 学校での様子は、直接把握していませんが、その子につきましては、毎月第二日曜日に開催している「LGBTQ+カフェ」には性の悩みをもった学生さんも参加しているが、その中で交流を深めている。

**奈良** 1点目は、学校との連携の話がありましたが、市長部局の社会教育課（人権啓発）と教育委員会との連携どうなっているのか。2点目は、

LGBTQに関わる問題では、制服問題というのが大きな課題があると思う。『制服問題を解決にむけた行動』ということがありますので、もう少し詳しく教えてほしい。

**大阪** LGBTQを含めて、民族差別も含めて、差別の立場の人の出自がわかった時に、自分だけではなくって取りまく家族との関連性も必ず出てくるわけですが、その時に行政としてとか、その当事者がカミングアウトしたときのフォローを含めた家族に対する支えだとか、家族の中で相談した結果、出されたのかとか、親は知らないけれども、本人がその先生を信頼してカミングアウトしたってということも含めてあるわけですが、後で家族がそんな言わなかったらよかったなということも含めてもめることもありますから、そういうことがあったのかなかったのかも含めてお聞きしたいと思います。

**報告者** 学校との連携について、数年前までは教育委員会部局に、人権担当ありましたが、今は市民部の方に人権教育室が学校と連携しながら業務をしている。私どもは社会教育を中心に人権啓発を行っております。学校との連携については、中学校区ごとに交流会をして人権啓発指導員や人権課の職員が参加し、一緒になって人権問題について考えていくような状況にあります。毎年、学校部門で市指定校を決めて、年1回、研修をしている。そちらにも、人権課の方から職員が参加し、助言とかをしている。制服問題につきましては、「しゃべり場」に参加されていた市民の中に、PTAの会長さんをされている方がいて、その方が非常に理解のある方で、学校においても、当事者の方と一緒に研修を進めていくことができた。その中で、制服問題についても、学校の中でジェンダーフリーの制服とかの取り組みが進められています。カミングアウトのフォローというところですが、なかなか学校現場に、私どもが携わることがないので、あくまで学校の教職員と連携する中で、人権課や文化センターで、つながりの中で情報を共有しながら対応している。学校の方で、様子を見ていただくような形で、何かあればということで、連携を図っております。実際に「しゃべり場」の中でカミングアウトした方を

サポートしなければならないという状況になったことはありません。

**奈良** 「しゃべり場」の会場を話しやすいような雰囲気ということで作られたと思うのですが、どんな会場で、どんな部屋で、どんな雰囲気で行ったかを教えてください。また、カミングアウトに関わって、「しゃべり場」の中で出てきたカミングアウトが、アウトティングにつながらないように気をつけていることがあったら教えてください。

**奈良** 「しゃべり場」の中で、なかなか自由に言いにくいという雰囲気になりがちであると思うが、司会の方とかどんな感じで進めていったのかななどを聞きたい。

**奈良** 私が教育現場にいった時に、相談がありました。その子は体が男で生まれて、心は女の子で相談がありました。その子は、かなり以前から不登校で、性的マイノリティの生徒の中になんか不登校がいるのではないかと思います。葛城市では、その子らの支援として、臨床心理士が相談にのったり、保健センターに教室を設けて、一時的なところから行けるような対策をずっとしてきました。そこで質問ですが、臨床心理士が学校との関りをもっているのか教えてほしい。

もう1点、「LGBT」と「LGBTQ」の2つ表記があるのですが、区別して使っているのか。それから、「部落差別をはじめとする人権課題」と書いているが、「部落差別をはじめ」というのは、いつもいわゆる枕の枕言葉のように人権問題に語る時に、全てつけているのかを聞きしたい。

**奈良** 「あゆみさん」の存在もかなり大きかったのではないかな。その方が市役所に足を運ばれて、市役所の方と話をされる。その関係がいいからこそできたのかなと思います。「あゆみさん」がどんな思いや気持ちで役所の方に来られて、どういう願いをもっているのかということを知りたい。

それともう1点、「しゃべり場」の中で中学生が「私もこうなんだ」ということを、初めての相手に絶対しゃべらないと思う。おそらく「あゆみさん」が、いればこそ気持ちをわかってくれる。そんなところで言ったのではないかなと思うんですけど、そのあたりの事情を報告された方は、どういうふうに受け止められているのか。ここが問題

を取り組む一丁目一番地になるのではないかなと思うので、そのあたりの受け止め方を聞きたい。

**報告者** まず「しゃべり場」の会場や雰囲気づくりですが、会場は、コロナ禍だったということもあり、作品展示ができるような会場です。第1部ではスクール形式に机を並べて、LGBTの基礎的な話とか、「あゆみさん」に話してもらった。その後、椅子を円状に並べて向かい合って、話し合いがしやすいような雰囲気の中で会場の方はセッティングをした。職員は私服で参加しますし、私もニックネームをつけているのですが、参加のみなさんにもニックネームで参加していただいている。ニックネームを自分でつけてもらい、今日はこのニックネームでいこうということで名札につけて、皆さんに分かるような形で参加してもらっている。それからアウトティングについてどう対処しているかということですが、「しゃべり場」の方に参加するにあたっては、参加して得た情報は他言無用のお願いを徹底している。その中で参加者の方も、話しやすい雰囲気ができたのかと思っております。臨床心理士について質問ですが、私が把握している限りでは、学校の方でソーシャルワーカーをされている方が臨床心理に詳しい方が対応されているのかなと思っております。「LGBTQ」とか「LGBTQ+」など言葉の使い分けですが、それ以外の方もいらっしゃいますので、使い分けというのは特にはしていません。「部落差別を始め…」という言葉は毎回つけているのかというところですが、基本的にはつけるようにしています。「あゆみさん」が、どんな思いで来られたかということですが、「あゆみさん」が2019年に市が開催した古典の講演会の時に、アンケートの「男」「女」「その他」という性別欄をみて、性自認について理解があると感銘を受けられました。どんな人がアンケートを作ったのか、作った人に会いたいという思いがあって、市役所を訪れていきたくのが1番大きい理由だと思います。中学生の気持ちをどういうふうに受け止めているのかということですが、中学生につきましても、私が直接話を聞いているのではなく、アンケートの回答で書いてあった内容です。職員と直接話すというのは非常にハードルが高いという

か、生徒さん自身も変容をしてしまうことになるかと思っています。当事者の方と、話しやすい雰囲気の中で、質問をしたりする中でそんな気持ちになったのではないかと考えています。

**協力者** 「あゆみさん」が、アンケートの性別のとり方で、アンケートをつくった人に会いたいという、その思いの先にはどんな思いがあって、会いたいと思っておられたのか。

**報告者** それについては、性自認について理解があると喜んでおられて、来られたと思います。

**香川** 「人権しゃべり場」に参加して、講演会に来てもらった時に、2人の話を聞いて、自分の従妹も体は女性で、心が男ですという話を伝えた。いろいろと考慮する中で、やっぱり講演会とか研修ですのもいいのですが、少人数で講演会をしてくれたらいいなって思っていた。その矢先に「人権しゃべり場」を行ってくれて、みんな笑顔で穏やかでのんびりした雰囲気のいい中で開催しています。本当に「しゃべり場」に参加してよかったなと思った。支部で意見交換会というのを年に1回行っている。行政と選択制の制服とか水着について、人権館のスタッフといろいろと協議する中で、来月の意見交換会が開催されます。その中で回答をみますが、私も報告者に教えてもらったことがあります。自分は男の人に生まれて、女の気持ちになっている方の考えが強く、女性に生まれて、心が男性という方について、ちょっと無頓着になっていたことを気づかせてくれた。それが報告をしている大森さんです。うちの支部としては、人権課、ふれあい文化センターが連携を密にしながら、相談しながら行っています。何かあれば近くにいて相談できるという状況なので、非常に助かっています。これからも人権ふれあいセンターのみんなに頑張ってもらいたい。それと次回からはしゃべり場は同和問題と決まっています。また、その中で、自分にも何か話ができることがあれば、協力して行っていきたいなと思っています

**協力者** 同和問題っていうところをテーマに、「しゃべり場」の中で、話ができたらってことですが、解放同盟としても、同和問題をテーマにした「しゃべり場」で、こんなことを期待した

いと思っておられることはありますか。

**香川** 「しゃべり場」で、部落差別は本当に「する側」の問題であり、「される側」の問題でないということを、人権課やセンターの方も自覚をちゃんとしてくれていて、その中で自分はその時は個人として参加している。支部でもありますが、個人として参加しているので、その中でいろいろな会話を聞く中で、やっぱり行ってよかったなって思う。それと、もう1つは第2水曜日にLGBTQカフェっていうのを、9時半から11時半まで、人権課とセンターのタイアップで開催しています。コーヒー飲みながらお菓子食べながら、それこそ、そんな時も和やかな雰囲気で行っています。それで自分がその中で、何ができて言うことは、今はちょっと思い浮かばないですけど、おいおい人権課とふれあい文化センターと協議しながら、その部分については行っていけたらと思っています。

**香川** 観音寺市のふれあい文化センターの者です。実際に「しゃべり場」を行ってきた者としてしゃべらせてもらいます。人権課題の問題はどこにあるかっていうと、当事者ではなくて、その周りにある。そう強く思っています。周りが自分こそが当事者なんだと、自分こそが課題を担っていくとか、課題解決を担っていく人にならなければいけないんだという意識を持ってもらわないといけない。雰囲気を醸成しなければいけないという啓発の1つの大きな方向性かなと思います。それから、そういったことのためにどうするのかという、当事者とつながらないといけない。当事者とつながっていくことによって、そういったことが進んでいくんだろうなとは私は思っています。当事者とつながる、そして自分の思いを話し合える場を作ろうと思って「人権しゃべり場」を作りました。その詳細については今、大森さんが話をした通りです。その中で「LGBTQ+カフェ」を行っています。それは行政がしているのではなくて、当事者が組織を立ち上げて活動している。我々はそれをサポートしているような立場です。行政が行った「しゃべり場」を種にして、そこから芽が出て市民の中で、当事者どうしあるいは当事者と周りの人がつながっていく組織あるいは活

動が行われていく。そういったことができていくことは、私は嬉しいなと思っています。その中で、LGBTQの当事者の話で、LGBTQについてのマイナスの発言がまわりにはあるんだということ。実は部落問題でもあるんだよっていうことを言っています。僕がここに来て、私たちがここに来て、我がここに来て、ふれあい文化センターと一緒に話したことによって、部落問題も我も課題なんだと感じてもらえたから、「そのことについては違うよな」「こう考えるようになった」とか、「部落問題の啓発の場にも足を運ぶようになった」というような声が聞こえています。1つの課題から別の課題に広がっているっていうことが、私にとってはとっても嬉しいなと思っています。報告者が語っていない成果について補足させていただきました。

#### — 報告 2 —

ぬくもりのまちをめざして ～もてる力を持ち寄って～

(大阪府人連)

#### — 主な質疑と意見 —

大阪 向野校区の中学校の教員をしています。塩谷さんの話に加えて学校の話をして。近年、文科省の指定を受けて、学校で公開研究授業をすることありました。その時にどんな授業をつくっていききたいか、ということをして学校の中で話をしたんですけども、その中で、やっぱり地域の人と一緒に授業をつくりたいなっていう思いもあって、模擬授業をやって、地域の人にどんな感じか見に来てくださいと言いました。来る前は、「なんか先生たちがやっている中で、私が行っても、ようしゃべらへん」と言っていました。来たら来たらでむっちゃ、喋ってはります。いろんな授業を地域の方に入っていたきながら何本も授業をつくって、全体で今日の研修、公開授業に向けた取り組みをまとめてくださいと、塩谷さんに話を振ったら、塩谷さんがすごく喜んでくれはったというか、「こんなふうに入権教育に取り組んでんの、こんな間近で見えて、すごい嬉しいわ」と言うて、泣いてはってご自身、自虐的に鬼の目にも涙や言うてはりましたけど、学校がやってることに地域の方がもう賛同してくれたり一緒にやろうって

言ってくれるのはすごくありがたかったです。

兵庫 今、思っていることは、子育ての支援っていうのは、この国はセーフティーネットがないんです。そういう意味では、この育児支援家庭訪問事業とか、子育て支援事業としての具体的にどう活動しているのかとか、託児事業をすることになった背景をもう少し詳しく教えてください。

報告者 地域として、子育てのこととか、同和保育運動の中で、保育内容についても学習をしてきましたし、1日24時間の中で学校とか保育園とか幼稚園にいる時間、家庭にいる時間、社会にいる時間、それぞれが違う方向になったら、子どもたちがどっちに顔向けていったらいいかわからないから、地域との連携が大事だということと同和保育の中で学んできたんです。その中で、気が付いたら周辺の人たちが核家族化されていて、隣とのつながりがなくなるとか、子どもが病気になった時にできひんとか。それから、出産後にしんどくなってとかいうのがあって、保健士さんが指導にあって、そういう人たちがアドバイスをするっていう養育支援事業として、厚労省から予算がでます。そのお金を私たちが羽曳野市にあって、地元として事業委託をするから、その事業を取ってきたらどうかという話をして、養育支援事業を行ったり、病後児保育も国から補助金が出るから、その補助金を活用したらどうかとか。国の制度を活用していく中で、地域としての支援ができる。お金が伴いますから、そういう支援ができるような補助金を探してきて、引っ張ってきて事業する。それをNPOで事業しています。今、病後児保育園に働きに来てくれる人は、保育園に預けてないけども、遊びに行く。親子で保育園に行くまでに、子どもたちが遊びに行く。0歳児や1歳児のその時に、うちの保育園に来ていた人たち、利用者が今職員として働きにきてくれているから、人を育てることも含めてそういう支援の大事さ。それから養育支援事業っていうのは育児放棄したりとか、それから病院に行くのについていくとか、ちょっと育児相談したりとか、離乳食の作り方の相談をしたりとか、そのために看護師とか保育士がいて、栄養管理士などのスタッフの人たちが対象に支援に行くっていうような事業。国から補助金

を取ってきて、できるような事業を今やっています。利用されるのは羽曳野市全域の人ですから、向野の人だけということにはない。病後児保育も羽曳野市内の全ての保育園児、幼稚園児は全員登録型で会員になっています。羽曳野市内に勤務されてるたち料金をいただいて、保育を行っています。

**報告者** 子育てということでの質問についてなんですけども、今の話は、子どもが小さい頃、年齢が低い頃の話ですが、実はこの全人教で、学校の報告もしています。そこには中学校から進学どうするんだっていうなかで、進路をどう選択していくかという部分で、お金のかからない学校との連携、どういうふうにその子が進路を選んでいったのか、また地域を離れてしまうんですが、地域とどうやってつながっていったのかということが、詳しく書かれています。そちらの方も見ていただくと、地域の子育て、学校と連携しての子育て、本当に1つのケースとして書かしてもらっています。大きなことではないかもしれませんが、そういうところも読んでいただいて、見ていただければいいのかな、というふうに思います。

**報告者** あと、大阪府連が立ち上げました。フードバンク制度があります。賞期限前の商品として売れないものをいただいて、養育支援の家庭に配ったり、そういう活動もしてますし、識字教室で子育て親育てということで、親子で識字教室に来て親の学んでる姿見せて、子どもを勇気づけるようなそういう支援も一方ではやっています。それが第3分科会⑨の実践報告に載っています。

**香川** いろいろな活動する時に最も大事なのは何のためにするのかっていうことを、そこが肝であると私は思います。向野まちづくり協議会が、一体何を目的にやっているのかなっていうことを教えていただきたい。また、どのような組織なのか、ここには病後児保育について関わっていますが、それ以外にもたくさんの具体的な取り組みがあるんだろうと思っているので、この組織がどのような取り組みをして、地域にネットワークを張っているのかということを知りたいと思います。

**報告者** 1番の目的は、地域が元気が出るように

ってことです。地域からよそに出ていった人も、自分の故郷が誇れるような町づくりをすることが、地域で住んでいる私たちの役割かなと思ってがんばってる目的の一つであります。ぬくもりのまちをめざしてます。ぬくもりってというのは、人と人のふれあうからぬくもりがあって、ふれあわなかったら冷めてしまう。だから程よいぬくもりを程よくやっていこうというのは地域の合言葉でありまして、そういうまちづくりをしています。まちづくり協議会の構成メンバーは、地域の食肉産業後継者会とか、町会、老人会です。それから食肉組合、青少年指導員だとか、市営住宅の理事会とか、それから地域内の施設の館長さんだとか、所長さんとか、小学校、中学の先生方で、幼稚園とか、そういう人たちも入ってやっています。その中でまちづくり協議会を立ち上げています。全体としてもありますけども、教育小委員会、産業小委員会、住宅委員会、福祉委員会として、分科会構成をして、教育小委員会には、教育保護者会だとか、幼稚園の先生だとか、学校の先生とか、青少年児童センター、それから青少年指導員さんとか来てくれています。産業の部分では食肉後継者の会と職肉組合の人たちが、住宅委員会では、市営住宅の役員や管理人さんとかがやっている。福祉の関係では「福祉と人権のまち向野」という組織を作っています。その代表だとか、それから民生員さんだとか老人会とか、老人いこいの家だとかで、青少年児童委員さんとか、積極的に、公的な役職には運動側が関わっていくことで、民生委員さんとのつながりが結構できました。それから青少年児童委員さんも横のつながりができて、そういう人たちがサポートして、ボランティアや向野に行事があったら手伝いくるなど、そういう体制をやっています。大きな目的としては、市営住宅の集合建替のまちづくりの環境にもなっています。産業の委員会では、毎年ミート・ミートフェアといって、「お肉と人との出会い」ってということで、5000~6000人が参加されて、お肉を安売りしたりとか、いろんな食べたり煮たりするイベントの中心的な役割を担っています。教育の関係でしたら、毎月、先生方とか地元とかPTAの皆さん方と一緒に地域連携会議をして、地域の子

どもたち、学校の中での様子はどんなにかいうな。そういう会議をしている。福祉関係だったら、地元の人たちが地域に来る人だけじゃなくて、地域からどんどん出向いて行って、相談事があるかも聞いています。福祉の関係ではケヤマネージャーさんに「介護認定はどうしたらいいかとか」「デイサービスにどこ行ったらいいか」とかいう日常のお手伝いも、まちづくり協議会で行っていきます。

**奈良** 私の住んでいる町でも、子どもたちに地域学習として、地場産業の学習を進めています。「牛を割る」ということに対しては、やっぱり避けて通れない。この言葉は、本当に私の心の中にズドンと響いて、なんとも言えない気分です。子どもたちが、これからキャリアを積んでいく。また、地域学習を進めていくにあたって、ここの資料の中に書いてあります。「牛を割る」ということは避けて通れないって場面を、どのように小学校や中学校の地域学習や労働体験見学の仕方とか、どういうふうに行われているのか、もうちょっと詳しく教えていただきたいと思っています。

**報告者** 学校側としては、コロナの関係で自粛されてるところがありました。労働体験はここ1~2年はできていません。ミートセンターの見学もできてないです。その代わりにビデオがあります。牛を割る場面、ミートセンターの中での場面、割った後の牛をどのような状態でさばいているかという場面です。それからさばいたあとの肉は店に行った時にどういう形になるか、いろんな先生方が自分たちの手弁当でコロナの時にいろんな研究をしながら作ってくれたビデオがありまして、それを子どもたちに見せたりもします。また、実際に働いている人たちが、学校行って自分たちの思いを自分の言葉で語ってくれる。そういう授業をしています。私たちの学校に言うんですけど、向野だけがゲストティーチャーじゃないです。周辺の人たちも同じようにやって、地域全体としての学習をやっていかなかったら、なんで向野ばかりになってしまう。そういうことも含めて、地域全体としての思いの中で、学校は何をめざしていくかっていうことを考え、取り組みをしてほしいってことを言っています。

**香川** 食肉、屠畜場の偏見。そこに対する偏見と

か誤った噂による差別。非常に苦しい中で、それを打ち壊して、地域だけじゃなくて、周りの方と非常にいい関係ができていると思いました。私も三豊市ってというのは、香川県の小さな6万人あまりの市で、どんどん少子高齢が進んで、どこの地域もそうだと思いますけど、本当に地域自体がもう成り立たなくなっている。限界集落とかいう言葉に代表されそうになってきている。周囲の人に向けて、地域の中から発信して、周囲の人もそれに関わってとまっていると思うんですけど、まちづくり協議会の活動の中に、周囲の人たちは入ってきているのか、地域の中で取り組みをして、今までやったら地域が出て行って、どんどん人口が減っていったところだと思うんですけど、それがどれぐらい変わってきたのか。この地域の取り組みによって、人口の減少とかそこら辺に対してどれぐらい効果があったのかっていうのを、教えていただけたらと思います。

**報告者** 地域の人口は減少しているのは事実です。市営住宅の新しく建て住宅の入居決定も出せません。だから入ってきてない。地域の人若い世代がよそに出ていくことは、地域から逃げるんじゃないくて、地域がなんかあった時、来てもらえるような関係を作っていきたいと思っています。だから、よく青年たちが家を買ったら、「おばちゃん部落から逃げると思わんでね」って言いに来てくるんです。「逃げるって思うてないねんね」って、その変わりおばちゃんが「来て」って言ったときは、「飛んできてや」って言うている。そういう中で、絶えず地域に目を向けた生き方をしてほしいということは、子どもたちも発信しているんです。今回の市営住宅の集約立替も含めてありますから、若いメンバーも来てもらえるような入居基準を市も検討しています。羽曳野市人権教育協議会とかありまして、その周辺の人たちがあの会長、地元の人が会長ですけども、周辺の人たちがみんな役になってくれています。それと羽曳野市の人権審議会、男女参画審議会の審議員さんは全部向野の学習にフィールドワークに来てくれます。審議会の中に専門部会として向野学習もやっています。審議員に出身の人を送り出すように、ということで、向野から選出した審議員も送って

います。

そういう関係で周辺とのつながりは、特に青少年指導員さんとか、民生児童委員さんとかはいろんな福祉の関係とか、イベントの関係の時にお手伝い、駐車場の整理とか、ちょっと手伝ってなどかいうのも含めてお手伝いもしてくれます。そういう中で地域の人たちとつながりが密にできるような気がしています。今日も羽曳野市から、教育長も来てくれていますし、心配して応援に来てくれたのかなと思っています。行政も含めて、地元としては行政にやってもらったものは逃がしません。その代わり「自分たちでやらないとあかんことは絶対、自分たちでやる」っていう。その住み分けはかなりがんばってやっています。

**報告者** 塩谷さんと一緒に活動させてもらっています。まちづくり協議会の者です。今、いろんな人を巻き込んで、部落の人も部落でない人も一緒にいろんなことを考えていく、ということを書いたと思うんですけども、その1つとして、私、青少年児童委員をさせてもらっています。もう1つ言えば、羽曳野市の男女共同参画の委員もさせてもらっています。その中で、コロナ禍の前に会議がある度に、当事者である部落であり、女性であり、私、シングルです。三重苦は、プラスアルファしても全然楽にならんよ、ふつう1つ1つたしていけば、楽しくなったりしていくもんやけども、苦は3つになったら、さらにしんどいだけやという話とかをしていきながら。羽曳野市に向野という部落があります。ミートセンターという食肉の工場があるんです。それがどういう所か。それは私にとって故郷でもあるけど、いろんな人たちにとっては差別される対象の場所である。みなさんお肉を食べるのに、肉を食べるわりには、牛を割って命をいただいて感謝しながら、仕事をしている人たちに対して「牛殺しや」という言葉を投げつけるところがある。せっかく羽曳野市にそういう場所があるんだから、ぜひとも見に来てくださいということで、6年間かけて、説得してフィールドワークに来てもらいました。本物をやっぱり見ていただきたいんです。どんどんどんどん表に出ていって、部落って言うのはしんどいです。私は前に立つのは嫌です。私は前に立ちたくない

です。なぜなら、こういう時に話すということは大切なことやし、ありがたいですけどけれども、私がここに前に立つということは、部落差別がまだあることに対峙するということから始まるんです。まだまだ差別があるから、私が前にたってみなさんと向き合わなければならない。こっちを向いて人の話を聞くのではなくて、私は話を、まだまだ部落差別があるんですと伝えなければいけない。葛藤があるんです。そのことを知っていただくためにも、リアルに五感で考えていただき、見ていただき、聴いていただき、食べていただき、鼻で嗅いでいただき、そういうことを感じてほしいなと思ってやっていますので、本当に向野にいらっしゃってください。温かいまちづくりをしておりますので、どうぞ、よろしくお願ひします。

#### — 1日目総括討論 —

今日の2本との取り組みで言うと、「生きやすさは、作ることができるんだ。」すべての人が暮らしやすい。生きやすいつていうのは、自然発生的にできるわけではなくて、まわりの人たちのいろいろな取り組みで、その生きやすさは作れることが、今日の香川県、あるいは大阪府の取り組みを貫く柱としてあるのではないか。そこら辺に絡めて、こんなことを自分の所でやっているよということをお聞きできたらと思っている。

**大阪** 先ほど、うちの報告で「圧倒されました」とか「すごくされてますね」っていう話があったと思うんですけど、じゃあ羽曳野市の子どもたち中に、差別意識とか偏見がないんか言われたら、今年、私が担任してる子どもから偏見とか差別意識っていうものを感じました。うちの地域には食肉のまちがあると、食肉産業に携っているという話をした時に、子どもが「どこっ？」て、校区の隣にあって、その子が習い事で通っていると言ったんです。通ってて、「知ってんやん？ どう思ってるのん？」ってさりげなく聞いてみたら、その子は「俺、あそこ嫌いやねん」って言うんです。「なんで？」って聞いてみたら、「あそこ、牛を殺してるやろ」という言葉が返ってきた。先ほどの塩谷さんが昔、そういうことを言われた言葉があったのと、ほぼ同じ言葉が小学校4年生から返ってきた。結局、これだけやって自分も携わってきたけ



ど、まだそういうことがあるんやなって、塩谷さんの言葉でいうと「出てから勝負やで」ということを言われて、「あっ、出てくれたな」って、素直にポンって出してくれたらよかったなと思っています。でもあるんだな。これだけやっても出てくるんやなっていうのは、すごく感じた場面が今年の6月にありました。そこからやっぱり今まで教えてもらったことは、「本物と出会う」ということです。そこにもう一度立ち戻って、今の学校の取り組みにはなかったけど、実際に食肉に携わる人に来てもらって、どんな場所かっていうのをきちっとその子に伝えたらいいわって思ったら、そこから始めたらいよいよって思ったんです。来てもらって話を聞いたときに、実際その子に「話を聞いてどうやった？」って聞いたら、「オレ、あの場所、好きになったわ。めっちゃ大切な場所やなって思った」と答えたんです。だから、やっても絶対そういう意識っていうのは潜在化して、心の中に出したらあかんって気持ちがあるから押し込めてしまうんやけど、それを出るところをまず作ること、そしてそこから何をやるのかっていうのを考えることの大事さを改めて感じた。作っていかなければ、言えるきっかけも作っていかなかったら、見えてこないし、解決策もとられないと思った。あれだけやっても、あるんだということ、ここでスタートとしてもらえたらいいかなっていうふうに思っていた。観音寺市の報告の中で、「男・女・その他」っていうので、人権意識がすごく高いから、この人の話をしてみたいなって思った。私自身、そういうことをいろいろ学習する中で、当事者の方と話をする中で、当事者どうしても意見違ったりするなって思ってるんです。当事者じゃないけれども、その質問のアンケートを見た時に「男・女」と書かれていたら、この質問項目いるのかと思う。先ほど報告者の方と話をしたら、行政の方ではできるだけいらない選択は作らないようにするって聞けて、次の段階も考えて、まだここから改善できるとかっていうことを考えてますっていうことを聞けたんです。だから、今回の私たちがやったことを、ここで終わらせたいいけないっていうことをすごく思った。

**香川** 先ほど、子どもたちが差別発言をしたこと

をきっかけに、実際に見てもらって好きになったという話があったと思うんですけど、塩谷さんの話を聞いた時に、子どもが親の仕事を言いたがらないということをきっかけに、こういうことを始めたって聞いたんですけれども、子どもがこういうふうに変ったってあったと思うんですけれども、実際に親の仕事を言いたがらない子どもが、この見学とかそういうことをしたことを通して、その後どういうふうに心が変わってか、例えばみんなが知ることで見て、なんかこう何か自分が知らなかったことを知ってしまった。余計に生活しにくくなったものか、それともいい方向に変ったものか、マイナスなことがあったとしたら、先生方とか地域の方は、どんなふうに子どもたちに関わっていったかというのを聞いてみたい。自分が人権課に来て感じることは、相談したくてもできない方が、実際に自分のことを気にして真剣に自分の方を見てくださる方には、ちゃんと自分の相談が言えるように変わっていているのではないかっていうのを感じたことはあります。ただ識字学級の生徒さんがただ文章を読むんじゃなくて、その人をちゃんと見て、その人がわかるとるか、どんなふうに思っているかっていうのを考えながら、しゃべるのが大事やだということに気づかされた。私の市でも、悩みを持っている方にちゃんと向き合っている人が相談をした時は、その方はちゃんと答えを返したり、悩みを返したりして、またそれに対して向かい合っている姿を見ると、うわべだけでなく心と心のつながりっていうか、そういうのが大事なんだなと感じながら仕事をしております。自分もそういうふうに仕事をしていかないといけない、というのを学んだ。

**大阪** 先ほどの「自分の家の仕事隠したがる子ども」っていうお話ありましたけれども、今、現状で言えば、自分ちがお肉屋さんをしてるっていうことを隠さなきゃいけない。隠したいっていう子どもっていうのはないじゃないかと思う。なんでもかという、学校の中で取り組みとしては、小学校1年生で入学してから、幼稚園とか保育園のところからも連携しながらですけれども、中学卒業まできちんと積み上げていく教育を学校の中

で取り組んでいます。それが1番大きな要因かなと思います。学年とかクラスによって、食肉関連のお仕事されているお家の方とかいらっしたりするので、お家の方とも連携しながらこういう学習を進めていきたいんやって学年で進めています。私、今、中学校3年生担当で義務教育学校という小1から中3まで一緒の学校にいます。その中3の子で、お父ちゃんの食肉のことを、誇りも持っていてで、そのお父ちゃんも学校の方にお話しに来てくれる。語ることで子どもが俺の父ちゃんかっこうええやろ、誇にねと思えるような出会いを、子どもたちに提供できるように授業をやってます。それで、その子は「俺は絶対大きになったら、お父ちゃんが同じようなお肉屋さんになりたいね」って、みんなには言ってます。

**協力者** 周りが変わっていくというか、その当事者の人たちが頑張っって、その差別に負けない強さを身につけるといところでは決してなくて、周りがきちんとわかっていく。理解してこんなこと、こんなこと不合理だと気いていくみたいなところを、周りでこういかに作っていくかみたいところのはい1つの結果なのかなっていう気がしています。

**香川** 「生きやすさ」について、ちょっと感じたことを話します。38年間の学校教育に携わっておりまして、今人権課におります。いろんなところで研修をしり、話をしたりする中で、例えばLGBTQ+の話を考えみませんかとなった時に、必ず終わったら話に来られる方が数名いらっしやる。その時に初めてお会いした方なんです。例えば、「自分の子どもがLGBTQなんだけれども」という親が話に来られた。いろんな話を、席を切ったようにたくさん話をされていなので、その話を聞いているとその方の輪郭がすごくはっきりしてくるといのか、目がキラキラしてくるといのか。結局、その方は自分の存在を、悩んだり、苦しんだり、でも子どもの幸せを感じたり、思い合ったりする中で、言える場所がなかった、私たちに話をしている中で、自分が存在することの価値といのか、自分の存在がはっきりしているような、そういうことも役に立ってるのかなと感じるこ

とがあります。人にとって、自分を語れる場所があるということが、ものすごく大事だと、自分もそれに学ばしてもらっている。そういう意味で、今日報告の二本の中に、人と人とのつながりが確固として感じられてとってもありがたかった。

「いつまで私は前に出て喋らなならないんだろう」という言葉が、この半日の中で二度ありました。本当にその通だと思います。昔、子どもたちにLGBTQの話をした時に、「LGBTQの講演会、なんでそんなことするんやろな？」という子がいた。私はこの子は何を言い出すんだろうなと思ってドキドキしながら聞いていたんだけど、「そんなことせんでもこの人はこういう人なんだなって思ったら、それでいいやんないか。こんな講演会なんかしなくてもいいんやないか」という子どももいたんです。本当にその通りだと思った。そういうふうに子どもたちが育っていった時に、絶対になくなっていく。いつまでも前に立つ必要はないという世の中にしていきたいと思っています。

**奈良** 以前、大瀬市立脇上小学校、水平社発者地の地域で勤務していました。その時の全人教で報告をさせてもらった時も、牛の話をさせてもらいました。「牛を割る」といいう話を聞かせてもらって、命を大切にすることもあるんですが、なぜそこにこだわっているのか。それは牛を解体していただく方、牛を育てていって、牛を割っている方々の当事者の思いっていうのも、そこには含めて、私たちは子どもたちに話をしないといけない。そんなふうに思いながら、ずっと今もやっています。「牛を割る」といいうところで、本物に出会わず、人と人との温もり、とてもすごいそのフレーズが懐かしく感じました。奈良県では、小学校、中学校で「全ての学校に部落問題学習を」といいうリーフレット、また指導書等を作成し、実践も取り組んでいるところです。ただし、現実はその甘くはありません。その学習をしているところも、まだしていないところも正直あります。今この話にあったように「いつまで自分が話をすればいいのか」、20代、30代を先生方にもなかなか部落問題学習であつたりとかLGBTQの学習の話であつたりとか、やっぱり自分と関係がないそんな

ふうに感じてしまうように、職員の中にもいるのが現実です。その人たちにも、自分には何ができるのかな。こんなことってできるやんっていうようなことを、なんとか私自身、今人権教育に携わる中で、もがきながらやっているところです。取り組んだことで、マイナスイメージを持ったかどうか、その問いに僕が思うのは、また、そこからやってみるべきかなと思っています。マイナスになったとして、またプラスにしようっていう気持ちを持つことで、相手もプラスになってくれることってあるのかなと思いつつ、マイナスを恐れるのではなくて、やっぱり先ほどもずっとおっしゃっていた「やり続ける、止まっちゃいけない」、それを私たちが忘れてはいけないのかなっていうふうに思いました。地域に誇りを持って、また自分自身に誇りを持ってもらえる、そんな子どもたちをそんな地域に育てていきたいな。それは、水平社宣言の中にもあります。人の世に熱洗い人間で、このフレーズの中には、私は今になって思うのは部落だから、LGBTQの問題だから、私とは違うっていうのではなくて、その人を尊重する自分を尊重するそのような社会を作るために、当事者であれ、当事者でなくても、自分ごととして考えられるような、そんな同僚であり子どもたちであり、地域の人たちであり、そんな気持ちでいけるような世の中になっていきたいと思って、手をあげさせていただきました。

**三重** 学校教育の話にはなるんですけど、地域に力を借りてる話として聞いてもらえればと思うんですが、うちの地域に文化センターがあって、隣保館と教育集会所が併設されてるんですけども、聞き取りに行ったり、出会い学習でお世話になっています。その職員の方が3人でマイクを回しながら喋ってくれるんです。所長の方は解放運動ずっと担ってきたおいちゃん、別の地域で運動取り生んでいるおばちゃんが指導員されとって、識字の担当してくれてる元先生、この3人で喋ってくれるんです。ところが、この間、中学校3年生が最後の人権学習のまとめやっていうことで、小学校でお世話になったその人たちに再会する学習をしたんです。その時に3年生は若い先生らと所長がタックをくんで、俺らめっちゃ喋りた

いけども一回、子どもにしゃべらしたらどうやというので、子どもに持ち時間はたくさん持たせるんです。前半から子どもがいっぱい喋れるんです。その地域の学習会でずっと小学校からお世話になってきた。お礼を兼ねて喋る子もおれば、部落問題を考える中学生のつどいてあるんやけど、そこで当事者の子もおってんいうことを話す子もおれば、修学旅行でハンセン病の勉強しただけで、コロナ差別にもつながるし、今日のテーマになってる同和問題と関わることでもあるやんかと喋る子もおるしで、結果としては、あの子どもも発信して、おとなに受信してもらって、その逆もあって、ウインウインでめっちゃ良かった。誰か1人に背負わせないっていう、発信の仕方がお互いできたなっていうことで、それに刺激受けた先生方が、子らとかおちゃんやおばちゃんらに置いてけぼりされないように、自分らもまた語っていかないかん、というふうになっていったということです。一緒にやっているという感じにしていくあの地域とつがる話かなと思って、ちょっと添えさせてもらいました。

**大阪** 香川の報告を聞いていた時に思っていたことが1個あって、傍観者っていう言葉を使われていて、どういう人が傍観者なのかなって思ったんです。なんでかという、私が何年前に学校の校内研修に行って、いじめの構造とか差別の構造みたまいたいな話をした時に、傍観者は差別しているのと同じですよっていうことを伝えたことがあるんです。その研修会で、自分は差別をする人かしない人か、どう思うかっていう質問した。私自身は差別する人ではないと思うけれども、意図しない差別をしている可能性はあると答えたんです。気づかずに相手を傷つけたりとかしてしまっていることもあるかもしれないから、そういう人だと。だから、自分の意識とは関係なくそういう状況を作ってしまったかもしれないということは、地域から教えてもらったことなんです。その中で私は絶対に差別をしませんって答えた人がいたんです。この話をした後にですよ。この人はおそらく傍観者やと思っていないと思った。だって差別をしないって言ってるやから。そのあと、質問で「課題解決をする人」って言った

人がいて、これが大事なんやなって、一緒に課題解決をする人っていうのを、どんだけ作ってあげればということがとても大事なんやなって報告と質疑の中で思いました。そういう人って、どうやったら作れるんかなって。すごく今、いろんな人の話を聞いた時になんか共通していることは、啓発活動だけでは絶対つくられないなと思った。やっぱりその「しゃべり場」の話もそうやけど、なんか一緒に共同してやっていく人が増えなければ、傍観者もしくは差別をする人っていうのは減らないじゃないかと、今日いろんな話を聞かせてもらって思えた。自分がやってきたことも間違っていないか、なっていることをすごく確認できた。

### — 報告 3 —

#### 働きやすい職場環境のへの取り組み ～経営方針との融合～

(兵庫県人教)

#### — 主な質疑と意見 —

**香川** 地域に根ざした活動されていると理解させていただきました。その中で多様性について、今、日本が、企業の方で、ダイバーシティ&インクルーシブということをテーマに、多様な人材採用や取り組みが進められるところは多いと思います。私どもも今回発表の方で、LGBT と性的少数者について発表で行いました。それでお聞きしたいのは、多様な人材採用や取り組みに関して具体的にどんなことを取り組んでいるのか。特に、LGBT と性的少数者に対する取り組みがありましたら、教えていただけたらと思います。

**報告者** 多様な人材で言うと、海外の社員とかは今のところ採用とか特になんかいませんけれども、障害を持つ方は、4 人います。うつ病など患ってしまう社員も、年間何人かいたりします。障害のある方については、その人ができる範囲の仕事っていうところで、製品テストのサポートをしてもらったりと、サービスのサポートをしてもらったりと、設計業務とかはチャドさえ使えばなんとかなるので、その辺ができる方はそっちをしてもらったりとていうことをしています。できる範囲の仕事で、やってもらっています。特に、採用の時に、門戸を閉めたりとかっていうことをせずにやっていますので、本人がやりたいことできる範

囲のことを会社で協力できる範囲でやろうかなということ、その人たちを長く働いていただいています。精神的にちょっとしんどくなっちゃった社員については、転職対応ができますので、1 年経っても無理だったら、給与面とかでは少し減ったりもするんですけども、1 番長い社員だと、3 年とか 5 年ぐらいの単位で、途中調子が良くなってきたら、時短で働いて、やっぱり難しくなってきたら、病院から診断書が出るようになってくると、またちょっと休んでもらったりとかで、変則的にはやっています。最近はやっぱり在宅勤務が進んだこともあって、在宅勤務でできる部署の社員については、時短でやるところを在宅にしてもらったりすることで、割とスムーズに 1 年ぐらい復帰してくる社員も増えてきているので、その辺は変わらず対応していければなと思っています。LGBTQ の方は、当社の方は特に具体的にっていうのはないんですけども、ユニバーシティの方で、世の中でも取り上げられていて、困っている人もいるんだよっていう話を社員の研修は、毎年行っていますし、そういうことがあれば対応していきたいと思っています。

**兵庫** 淡路市の人権教育研究協議会の会長をしまして、プライミクスと淡路市人教とのかかわりについて補足をしたい。淡路市人教と企業ってなかなかこう連携ができていなくて、5 年ほど前に企業との関係を強化しようということで。私の方で、淡路市内の企業を回って出前講座の希望がないか訪問をさせてもらった。プライミクスさんで、毎年新任の研修の中で人権教育に関してやっており、毎年新任採用の方のお話をさせていただいています。企業は、なぜ人権に取り組み始めたかというところは、部落地名総監です。多くの企業や大学が購入をして、結婚とか就職とかの差別の材料に使っていたことが明らかになって、そこから本格的な企業における同和教育がおこなわれるようになっていました。なぜ企業で人権教育を行っているのかっていう位置付けと、部落地名総監がどういうものでやったのか、パワーハウスメント、セクショナルハウスメント、インフォメーションとコミュニケーションの違いなど、自分

なりに引き継いでやっています。淡路島には他の企業も来てますけど、本当に地元の人を採用して、地元とつながりながら地方再生という視点で取り組まれているということに、多いに感激して、淡路市人教としても、これから、そういう連帯を持って、淡路市の活性化というか、安心して安全なまちづくりに努めていきたいという先進的な企業であるということで、今回、ご発表をいただきました。

**奈良** 奈良県の南都銀行で人事担当しております。プライミクス様の経営理念であるとか、特に会社はみんなで作るものということで、非常に感銘を受けました。私もそうですが、経営理念であるとか会社の方針というのは、社員に伝えていこうとしても、うまく伝わらないと、どこも困ると思います。言い方を間違えれば、会社の押し付けと思われることになる。社員に経営理念とかを広めていくにあたって、工夫されている所とか、うまくいっている例がありましたら、教えてもらいたら、と思います。

**報告者** 経営方針ですが、実はこのブランドブック以外に、A4 サイズで中期経営計画書っていうのがあります。3年に1回、その計画書が更新されていくんですけど、重点として、10項目ぐらい、会社としては3年間でここまでやりますっていう目標を立てた後、それを各部門長が、うちの部門ではこれをやります。こんな計画でやりますっていうのを作ります。それを課長さんが部長さんと話しながら目標を立てて、社員が重点実施っていうところに、「じゃあ、僕はこれをやるんですね」みたいなことで落とし込みをするようになっています。会社が行く姿と、自分がやらないといけないことが常にこうつながる状態を作って、それが達成できたら課長さんの成績も上がるし、部長さんの成績も上がるし、会社の目標も達成しますねというような落とし込みの形を取っております。とはいえ、それだけやっていると、決められたことだけやればいいんですかみたいな話になりがちなので、ブランドっていうものを作りましょうっていうのをもう1つ置いています。これは当然、製品とかそういうのもあるんですけども、さっきも言ったように一人ひとりの

行動ですっていうことを、常にこうこういうブランドブックとかで伝えている。それから、マネージメントセミナーっていうものを作ってまして、それは社長だったり、各部署の取締役だったり、会社としてはこういうことはやっていこうとしてるんだよっていうのを説明したり、例えば半期でここまで結果が良くなったよっていうなことを話したりとかする機会を持ってまして、経営の内容とかの理解を管理職のところで終わらせるんじゃないで、社員に直接トップが話すっていう形を取って、社員一人ひとりが自分のやったこと、こんなふうに効果出たのみたいのを実感してもらえるような機会も作っています。重点実施を作った後に、他部所の社員と6人か7人ぐらいの組になって、自分の活動を紹介したり相手の活動紹介してもらったりして、それが会社っていうのは、営業からこう研究費を設計、製造、品証サービスっていうふうに、物が流れ、仕事も流れていくので、例えば成形の人が作ってる目標に対して製造の人が困ってるのに、「それやってくれないの」とか結構あつたりするんです。お互いにやり取りしながらえ、実はここに書いてないけど、こんなことをやっているよとか、ここをもうちょっと、例えば成形から製造に、一言書いてくれたら間違いが起きないんじゃないかっていうのを、自分たちがやり取りしながら、それを自分の学びにしてもらって、会社の中で、自分が参画しているっていう実感を持ってもらうように結構時間かけてやっている。

**香川** 働きやすい職場環境というテーマでしたので、働きやすいって、どんな人を想定しているのかなっていうのを聞きたいなと思います。例えば、部落出身の人が働きやすいって言ってどんなんだろう、LGBTQの人が働きやすいってなんだろう、それは仕組みや制度だけを整えたんでは難しいところがあるんじゃないかなと私は思います。意識、会社に社風とか流れているとしたら、そういった意識をこそ、そういったところに向けていかなければいけないのではないかなと私も思っています。そこで、どのような人を想定して働きやすい会社を作ろうと職場を作ろうとしていら

っしゃるのか、その手立ては何があるかっていうことをお聞かせ願いたい。

**報告者** 実際には、そういうことっていうのは隠れている部分が多分あると思います。社内でそういうことを自分で知らせてくれる人がいないということもある。マイノリティーになってしまう人たちが孤立してしまったりとかっていうことはあるから、日頃のコミュニケーションの中で、傷つけるようなことにならない発言っていうのは、やっぱり重要なんだよって。目の前にないから、知らないではなく、どこかで何かが起こっているっていうアンテナを常に張って、やっぱりコミュニケーションを取る時に、そういう発言とか、言葉遣いとか、態度、行動っていうのは、使えないといけないんだよっていう教育をずっとしているっていうのが今の段階です。働きやすい、どんな人をイメージしてって言われると、ちょっと今のところ、ちょっと具体的には出てこないっていう状況ではあります。

**奈良** 社員寮の方と、地域の自治会などに関わるとか、地域の行事に対する参加とか、わかっていることがあったら、教えてほしい。

**報告者** 自治会とのやり取りは総務とやっている。地域と直接やっているのは、クリーンアップ大作戦って言って、淡路島内を年に1回清掃している。鳴門海峡の世界遺産への申請に向けての活動ですけど、そういうのは、あの寮の子たちと出たりとかする。市の図書館で、赤い羽根募金とかを企画してやるんですけど、こんな企画やるんで来てくださいみたい。知らせが来るので、それは寮の人とかに言うと、その日に行ったりとかするぐらいになっていると思います。

**奈良** 人権の尊重に関してということで、差別に対して、人権の保護についての項目が記載されているように、企業の基準に逸脱の恐れがあった時は、通報を行うことにできるようになっていると報告をいただいたと思います。どの程度相談しやすいとか、どれぐらいの相談あってとか、あのその辺のところ、お聞かせいただけたらと思います。

**報告者** 月島体グループ企業倫理グループラインというのがありまして、これは第三者機関にな

るので、実は、直接私たちも連絡が取るわけではないんです。なので、全く無記名で、相談だけしたいというのもこのここに行きます。去年だけで5件ぐらいあったと思いますので、ハラスメントは、本人がするというよりは、見ている周りの社員が「気になるので」「あの人、大丈夫」「もしかしたら」「誰からずっと前からなんか付きまとわれているように見えるんだけど」みたいな相談とかも、ヘルプラインに届きます。無記名でメールとか電話でもオッケーなので、相談がありましたというのは私のところに来ます。問題を起こしている該当者は誰かっていうのはわかるので、誰が言ってきたかはわからないですけど、問題の人はわかるんで、ちょっとしばらくこっちで経過観察とかしながら、ひどいようだったら、注意とかさせてもらうんですけども、そういう意味では、社内の人に言うわけでもないので、無記名が大きいので結構あの相談は利用していると思います。合わせて、ヘルプラインは親会社のヘルプラインなので、ちょっと敷居が高いと思う社員もいるので、社内の人でよかったらっていうことで、社内何人か相談窓口を置いています。まず一報を駆け込み寺みたいな形で、どうしようっていう相談とかはしてもらおうようにしています。年間そういった小さな相談に含めると、10件弱ぐらいが何かしら上がってくるっていう状況にはなっています。

**奈良** 人を採用されることについてですが、書類選考とか、あるいは面接とか行われると思うんですけども、特に、性別欄について話題になったりしています。性別については、書類に書かせるとか、あるいは書かせないとか、あるいはどちらでもいいとかっていうようなことが話題になったりしています。そういう状況の中で、履歴書の中に性別欄、あるいは、世界の潮流としては写真を貼らないとか、あるいは年齢を問わないとか配偶者がいるとかいないとかを問わないとかいう様々な項目が問題になっていますけど、御社では、その辺の協議とか行われているのでしょうか。

**報告者** 当社の方でも、性別、写真とか年齢とかいうのは、問わないっていうふうになっています。当然、書類選考の時はそうそういったものは全然

ないので、面接でお聞きするっていうことになっています。といっても、基本的にそういうことを聞かないように、面接員に注意文章というものを必ず配るようにしてまして、基本的には本人の技術、それから過去学んできた学校での勉強のこととか、どんなことがこの先、この会社でできると思っているのかみたいなところを聞いて、その上、判断をするっていう形になっています。基本的に職種で性別分けていません。基本的に女性社員も男性社員も全員作業服です。みんな同じなので特に問題はないです。女性社員でも研究や成形・製造工程管理の方もいますし、管理職も私含めて今3人女性がいますので、割とその辺りはフラットな感じでやれる風土かなと思っています。

#### — 報告4 —

#### 多様な人材の活躍をめざして

(奈良県人教)

#### — 主な質疑と意見 —

**香川** 今は人権課に勤めておりますが、3月まで小学校の教員をしておりました。その長い教員生活の中で、知的障害を持つお子さんにたくさん接してきました。そんなお子さんはその子なりのスピードで一生懸命成長し、何かを成し遂げた時の素敵な笑顔、それからその子が持っている責任感をたくさん目にしてきました。そういう子どもたちが、南都銀行のようなところで認めていただき、立派な社会人として活躍し働いているということですね。大変感銘を受けました。聴覚障害、身体障害者、知的障害者とありますが、学校現場の方で、一番問題になってきているのが情緒に関することです。南都銀行さんのような理解ある取り組みができる企業さんの方で、今後取り組んでいただきたいと発言させていただきました。

**報告者** 障害によって、区分しているわけではございません。今まで身体障害の方とか、聴覚障害ある方を採用していたんですけども、どうしても銀行業務の中で知的障害の方は、採用が難しいというところがありました。なんとチャレンジドという会社を作りまして、どういった障害の方でも、採用させていただいております。

**香川** 障害のある方とか、そういった方の支援とか、全力で取り組んでくれているということは理

解できましたが、部落差別についてどのように考えておられるでしょうか。

**報告者** 人権を尊重していく、部落差別をはじめとして、差別をしないということを、職員の中で浸透させていくために、定期的な研修会を行っております。その講師には、奈良県人権教育推進協議会から来ていただいております。新入社員から支店長まで、全員が学習するという仕組みを作っております。そして、行動憲章を定めて、全ての人権を尊重することを続けています。

**大阪** 私は、奈良県民で高校3年生の子どもがいる保護者でもあります。進路真っただ中の子どもがいるんですけども、子どもの友だちに障害の子がいます。地域の中で共に育ってきた子が、社会に求められていきいきと生きている姿を、南都さんの報告の中で感じられて、とても嬉しい気持ちになりました。そんな企業に就職してほしいなというふうに思いました。社会の中に仕事があって、つがりの中で生きていけるってことは、何より人権確立だと思いますし、南都銀行さんが積極的にやっておられるのは、すごくありがたいです。ともすれば、社会に求められているかとか、法律で決められているからやっているとか、そういったところが感じられることがあったりするんですけど、今日の報告の中に本当にそんなことがなくて、共に社会を作る仲間、そんな意味でこう進んでいるんだっていうことを感じさせていただきました。昨日の討議の中で、自らの差別性に向き合って自己変革を行っていくことは、差別撤廃の道筋で重要になるということが確認されたかなというふうに思います。プライミクスさんにも、お聞きしたかったですけれども、この取り組みが、自分たちの大切な取り組みのきっかけというか、私も奈良県民なので、南都銀行さんが向き合っただけの差別事件というか、その辺りのことを、企業としてどう総括されて、今どんなふうに取り組んでいるのかっていうことをぜひお話しただけならなど、本日の報告の中でその辺りのこと語られていなかったんですけども、子どもたちの活躍する姿を報告する中で、人権確立をめざすまちづくりのところは、話が発信できるのではないかと思います。ぜひ、南都銀行さんがこれまで

考えてこられたとか、企業として向き合ってくれたところのあたり。企業としてどう総括して、それを今どう活かしているのかというお話いただけたら、学びがさらに深まるのではないかと思います。

**報告者** 過去に至らなかった点、これについてはですね。ご指摘のように、過去から私ども、ご指摘いただいて、反省しております。当行としては、差別の原因にもなる、履歴書の使用などを反省しまして、現在はそのような選考活動は一切行っておりません。また、就職差別が起こらないように従業員に徹底しているというところで、過去の反省だけではなくて、これからどうしていくかという中での人材育成に注力しているというのが現状です。採用選考にあたっては、出身地を聞かないということだけではなくて、必要なことだけを聞くということを当然やっております。私は人事担当で、実際に面説をしているんですけども、性別も聞いていませんし、本人がどういう勉強これまでにしてきているのか。当行で何がしたいか、何を強みとして、どういうことで当行、地域に貢献できるかというところを、一緒に対話するということを選考では大事にしております。条件面や給料のことを、しっかり話をして採用しているという状況でございます。就職差別だけではないと思うんですけども、事業員の人権教育ということですね、節目節目に必ずやっていくということに重きをおいています。

**大阪** 実際に働いておられる方の話も聞けたりとか、こういうことをチャレンジされている企業があるんだということを学校の人間として知れたことで、すごく先ほどの大阪の先生と同じで心強いなっていうふうに感じています。チャレンジド株式会社には、いろんな意味のチャレンジがある。働いている人が、次のステップに向かうためのチャレンジだったり、企業として、次にどこに向かうんだってチャレンジがあったり。障害のある方の就労をどうするんだっていうことのチャレンジであったりとか、いろんな意味にチャレンジしていることが想像ついたんですけど、障害のある方を就労ということ考えた時に、まだこれがチャレンジでしかない。日常ではないという捉

えであると、最終的にこの会社がなくなること、なくなっていくこと、日常になっていくことっていうのが、会社や僕たちがめざしていかなければいけないことなのかなと思いました。

1つ目、学んだことっていうのは、先ほどの回答の中で反省という言葉が使われたかなと思うんですけど、その辺りを聞かせてもらえたらと思っています。2つ目は従業員の方が電話対応に不安がっていることですが、なぜその不安があると思うか、もちろん新しい仕事だという不安はあると思いますが、その障害のある方の就労という視点で、なぜその不安があると思うかということも教えてもらいたいと思います。

**報告者** 我々の方で、チャレンジド社員のできる仕事は、こういう仕事だろうとか、ここまでだろうというようなことを決めつけていた。一緒に仕事をして説明すれば、どんどんと本人が理解して、吸収してできるようになるということが分かってきました。私自身も、一般の社員と同じように指導するにあたっては、丁寧に分かりやすく指導すれば、みんな同じようにあのそれぞれの能力の中で発揮できるということを学んだ。

**報告者** 1つ目の質問について、知っているつもりになったけれど、知らなかった。それに気づいて、もっとこうしよう、これからも勉強しなければいけないということがわかった。私自身も子どもの頃、学校では同級生の障害を持っている友人もいました。障害者差別があるということも、学校で学んで、知識として知っている、知っている方だというふうに思っていました。しかし、実際に会社に働いて、この人事担当になって、会社で障害を持っている方が働いているのを見ているという立場になった。また、対応をする中で学校を見学させてもらったりとか、先生方に伺う中で、障害を持つ方が働きたくても、働く場所が限られたりとか、働くルートがなかなかわからない、やりたい仕事ができないケースもあるとか、苦労があるということを知った。実際に職場でコミュニケーションをとる中で、最初はできなかった仕事も、だんだんできると、こんなこともできる、そういった実態を知ったというのが、学んだことかなと思っています。障害者、健常者に関わらず、



一人ひとり、できることとできないことがある中で、直接、本人と会話をしながら力が発揮できる環境を作っていきたいというふうに思っております。それから2つ目の不安の話ですね。なぜあるのかというところは難しいと思うんですけども、チャレンジド社員の子が「電話対応が難しき」と言ってくれたんですが、はじめ自分ではそういうご理解できなくなりましたが、今の若い子にとって、電話を取るっていうのは非常に怖いことなんだということを、若い子から聞きまして、私の世代でしたら、家で電話が鳴ると取ってたんですけども、電話っていうのは、誰からかかってくるかわかんない電話を取るものだと思うてる。今の若い子は、電話は誰からかかってくるかわかっている。そのナンバー、何かわかって出ている。家の電話で、だれかわからない番号から電話があっても、それを子どもは取らないんだと、若い子から聞きました。自分の子どもも家の電話をとることはないと思います。世代感の違いですかね。ちょっと話がそれてるんですけど、電話を取らないってことがなんであるのかというと、犯罪から守るためにですね。知らない人からの電話に出ないというふうに、今なっているんじゃないのかなと思いました。会社ではそうはいきません。そういうギャップの中で不安が生じるのではないかと私は個人的に思っております。どうしていくかという中で、会社っていうのは1人で仕事するわけじゃなくて、組織でやっています。これらの先輩や上司と、社内でも彼らを守る、若手を守る人がいます。会社に入ってから、障害の有無に関わらず、社員を守っていくというのが対策して必要なことで、その中で徐々に守られる側から成長してもらっていく、そういう体制が必要ではないかと考えています。

### Ⅲ 総括討論

**香川** 昨日、うちの人権課から報告がありました。その中で、部落問題について、特定の地域出身であるので、そこに住んでいることに、差別する人がいるということが問題だねっていうふうにあの報告があったんですが、ここに至るまでの話なんですが、ふれいあい文化センターで部落問題の話をしている時に、現館長なんですが、当時人権

啓発指導員だったんですが、その時に、部落問題って誰の問題ですかっていうふうに問われたんです。私が固まっていると、館長が差別される人の問題じゃないんですよって、これは差別をしている人がいるっていうことが問題なんです。これは部落問題じゃなくて、部落差別問題なんですっていうに話してくれたんです。その話がきっかけっていうか、始まりとなって、市が動き出し、決意表明というふうになりました。啓発って「ずっと差別をされて苦しんでいる人がいます。だから、差別はやめましょう」という発信がどうしても多かったんです。こういった啓発に出会う度に、私はあの被差別部落の出身なんですが、自分が差別される側の人間なんだとか、差別される側の問題なんだと思い知らされるが多かったんです。でも、そうではなくて差別する人がいます。そんな愚かなことをやりましょうっていうふうな発信にしていくことが大事だ。そこに焦点をあてたら、誰に対してやらなければいけないことかということが明確になってくるので、本当にこれは部落問題だけじゃなくて、全ての人権課題に当てはまるんですが、大森の報告が、すごく心に響きました。そういうふうに、一生懸命に考えて取り組む仲間がいてくれることが、私が知ったとか、生きていく上でも本当にすごく力になって、こういう仲間に出会えたことを特に誇りに思っています。

**兵庫** 昨日の話の中で、1番心に残っているのは、司会の方が言った「生きやすさは作り出せる」という言葉で、つまり、これはやっぱり生きにくくしんどい。生きることがしんどいというマイノリティの人がいる社会の中で、全同教が過去、ずっと取り組んできたことです。その結果として、生きやすさは作り出せるんや、それはこれまで差別される当事者だけが語って、そんな差別があるんやなっていう状況から、当事者も語るけれども、それに触発をされて同じようなしんどさを抱えている人が集える場所がある。LGBTQ+カフェとか、つまりしんどいことを語ることで、またそれにつがって語れる場所がある。これは学校の中で、立場宣言をする中で、それに伴って自分のしんどいことを語るという。同和教育が大事にしてきた

取り組みが、社会の中でもそういう取り組みをすることで生きやすい社会を作っていけるんだ、ということ、改めて学びました。それと同時に、今日の発表では、障害を持つ子どもたちが、作業を何回か繰り返して、就職につがる子もいます。今の南都銀行の取り組みに、私も元気ももらいました。しかし、そこからこぼれてしまう人たちがいる。つまり取り組みとしてのスタートがあるけれども、救われがたい人たちがいるので、それに対してどう私たちは見えなくされている存在、救われがたい人たちに対してどういう取り組みをしていけばいいのか。そのことは、今、引きこもり問題に取り組んでいますけども、本当にしんどい人が、なかなか声をあげられない。その人とつながっていけない。どうやったら、つながっていけるんだろうかという。自分自身の中での大きな悩みを抱えている中で、今回の小さなこう語り合う場みたいなことを作っていったらいいという示唆をいただきました。

**奈良** 先ほどの、差別する人にこそ、学びがあるんじゃないかっていう発言、本当にその通りだと思います。私も、性差別、性暴力っていうかのDVのことに関わる中で、今まではDVにあった人へ、どういうふうに取り組むかっていうのはあったんですけども、今DVをする人のその加害者はどうなんっていうことが始まっていて、その人たちの意識をあの変えるっていうか、そういう人たちの考え方、一緒に、そういう人たちの支援みたいなものも始まっている中で、当事者とは何かっていうのを、すごく考えさせられるところです。その中で私には障害の介護事業所の方に少しだけ関わっているんですけど、南都銀行さんの報告も、プライミクス株式会社の取り組みの中でも、枠にとらわれないで、その人個人の多様性を認めているような、今企業の中でもそういう動きがあるっていうこともすごくなんか、学ばせていただきました。先ほどの事業所なんですけれども、私がそこに働いていて思うのは、やっぱり周りの人たちがまだその人たちのことを、十分に知ろうとしていないと感じます。事業所としてはできるだけ施設の中にとどまっていなくて、いろんな場所へ行って、いろんな人と一緒に活動するっ

ていうようなことも考えているんですけども、でも、私も学校の中で教員として、障害児と言われる人たちと関わってきた中で、子たちが学校の中でいろんな人たちと関わるのが大事であるずっと考えてきました。特別支援学校の大事さもわかるし、特別支援っていう考え方もわからないことはない。できるだけ取り出さないっていうか、学級で他の子らと一緒にいる時間っていうのを第一にっていうのを全人教の場でも教えられて大切にしてきたものの1人だと思っています。その中で、今週8時間以上支援学級にいないと、学級として認められないっていうことを聞くのです。そこら辺について今後どのように考えていったらいいのかを考えているところなんです。

**奈良** 12、3年前に初めて南都銀行さんのドアを叩きました。特別支援学校の生徒の職場実習をお願いするということで、なんとか実施をお願いさせていただいて、10数年ずっと南都銀行さんとお付き合いをさせていただいています。当初から言ったのは、障害者差別とかは一切言ってません。とにかく職場実施して支援学校の生徒とお付き合いしてやってくれ、いい所だけを見てくれと、悪いとこなんぼでもあるねやから、そっち見たらあかんでいうようなところでずっと取り組みをしていた。報告を聞かしていただきまして、堂々と歩いている姿を感じまして、本当に嬉しく思っています。いろんな取り組みの中で不十分さはお互いいっぱいあると思います。不十分さを指摘してもなんにもならない。できるのは溝だけ。だから、私がいつも心がけたのは、小さな共感する気持ち、この細い糸、とにかく全部くらいついていきます。共感の糸をどんだけ太くしているのか、これは1つ1つの事実場面の中でお互いに気づいたこと、感じたことってのは、みんな、背景あれば歴史もあれば見方感じ方、全部違うわけですから、違うのが悪いのではなくて、その中でお互いが共通できる場所、そこを見つけようと常に心がけました。十数年、ずっと職場実習にいつている。やっぱり最初みんなわからへんけどわからんけど、こんなんできたし、こうしたかったんや、そこからどんどん変わっていて、実際なんとチャレンジド会社ができたと、現場の方々が従来通

りで会社ができたなという感覚でしたので、非常に嬉しかったです。で、先ほどの電話のこともあったんですけど、あんまり気になりませんでした。逆に嬉しかったですね。本人が会社の上司に不安と言えること、これがすごいと思ったんです。思ったことがお互いに言える関係、素晴らしいと思っています。ですので、実際にいろんな意味でまだまだ途上だと思います。不十分なこと、未経験なことがいっぱいあると思うんですけども報告を聞いて、会社本体のこと含めて、1つの会社組織として、共感と信頼関係、これが1つ1つ膨らんでいってるなと思いました。南都銀行さん、本当に地域の拠点という形で、高齢者の方が利用されているんです。ホール入口にある掲示につきましても、地元の将来ある生徒たちの作品を置いて、3~4か月ごとに入れ替えているんですけど、その時も必ず本人が持って来て、銀行の支店長さんが面談をして人となりを知ってもらおう。喋らない子たちが多いんですけど、そのことも銀行さんが受け入れて皆さん方を伝えてくれる。銀行で立っている方が、来られた方に何気なく喋ってくれる。これが地域の財産じゃないかなと思います。お互いの共感と信頼感をどう共通の話題として見つけてお互い発展させていくのか。そこを大事にしたいなと思いました。

**奈良** 奈良県中学校で教員しております。先ほどのプライミクスさんの話の中にもあったんですけども、働いてる中でうつ症状が出てきて、そこを1年とか、3年5年とフォローしていくような話がありました。私が仕事してる経験の中で、中学生でもうつ症状になったりとか、拒食症とか過食症とかあるいは統合失調症とか、いろいろな精神的な疾患を持つ子どもたちもおります。そういう精神的な疾患を持った生徒たちが、入院した時にいろんな家族さんと出会うこととかもありまして、過ごしにくさとか、周りの誰にも見えないしんどさで余計にしんどいから、周りとの絆がなくなって、悪化していく、そういうような実態がわかります。それで、これをやりたいとかっていうエネルギーがわかんない人たちのフォローとか、過ごしやすさ、そういったところ大事にしていけないといけない。そういう社

会であってほしいな、というのが、私の願いです。人権意識が少ないせいとか、まだ私の身の周りでは、心ない言葉が耳に入ることがあります。そういうことがなくなれば、ちょっと心がしんどいなと思った時に、すぐ精神科に行ける。周りからそういう目があるから行きたくないとか、ハードルが高くて治療に行けないとか、周りの目が気になって余計にしんどさが広がっていくとか、やっぱりそういうところも、自分の周りには結構あるので、ハードルがない社会になっていけたらいいなというのが願いです。

**奈良** 私の妻の病気でちょっと障害があって、まわりとつながっていけない。自分で障害を受け入れられない苦しみがあります。また私の子どもも、去年小学校6年の時から引きこもりで、自分の部屋、自分の家から外に出るっていうのが、何か月もできない。自分の子どもにとって「むなつき坂」ってどこにあるのかなとかと考えていました。週1回でも先生が来てくれて、「どうですか」って本人には会えなくても、私に対応します。先生と話をするんですけども、話できるってことが、すごく助けになる。スクールカウンセラーの人が中学校にいますので、話ができますってことになって学校に行きました。自分の子どもは制服着たこともないから、制服を着た子どもとか見たら、自分の子どものことを話すのも苦しいんですけども、救われたい人に見えなくされている存在、どういふふうにつながっていきなかっていうふうな感想を言っていた方がいいんじゃないかなって思っています。

**埼玉** 4本の報告はもちろんです。皆さんのお話を聞いて、明日からまた頑張れるなっていう力をいただいた。私の住んでいるところは、昔から10数軒の小さな被差別部落です。それで、救急車の消防車の通れない細い道、街灯もついてないような道、本当に何も無いづくしが地域だったもんですから、40年前から先輩たちと一緒に「子どもたちが安全に登下校できる道を作りたいね。子どもたちが遊べる公園を作りたいね。年寄りの

お茶のみできる集会所を作りたいね」ってことで、1つ1つと作ってきた。本当に小さな部落なんですね。約40年近くかかって、今できて、でもそのあと、あの子どもたちからね。だけど差別がいっぱいあるよ。私の娘は小学校6年の時に、「お母さん、お父さん、私をなんで部落に生んだんだ」って言ってきた。そういうこともあったし、小さな部落があちこちにある点になっている。親どうしで集まると、やっぱり子どもたちがなんでここに生んだんだってそういう話が出てくる。その中で私たちが悪くないんだよって。知らないで差別している人たちが悪いんだよってという話をお互いにし合って、支え合って、生きてきたんですけどね。今日、改めて会場の皆さん、仲間の皆さんからそういう発言も出て、もっと子どもたちも、私たちって頑張ってる生きてきたんで、悪くないんだよ。知らないで差別している人たちにわかってもらいたいんだよねって、その人たちに頑張ってもらいたいんだよねって話をもっとしていきたいなって改めて思いました。それともう1つはもう必死にまちづくりしてきて、余裕がなかったけど、もっと私たち自身もいっぱい勉強して、次にまちづくりで何ができるかということも考えていきたいと思いました。特に集会所、小さな集会所なんですけど、あまりにも私たち仲間は地域の仲間が少ないから、地域の仲間じゃなくて多くの人とつながっていかうってことで、集会場に館長をはじめ、常勤の職員を置いてもらう取り組みをしたりして、今は、地域内外でもすごく交流ができてきていることもあるんです。けどこの先、何ができるかなって、そんなことを、今回大会でいろんな知恵をいただいたように思います。また明日から小さな部落の仲間たちですが、他の仲間とも手を取り合って頑張っていきたいと思えます。

**香川** いろんなところからご意見いただいているように、全ての差別は差別する側の問題であるっていう認識っていうのは、これは持つとかないかんし。そもそも差別される側に問題あるっていうふうに思う方は、おそらく自己責任論で考えられるんじゃないかなと思います。部落に生まれたから、その人たちが悪いんだとか。障害を持って生まれたから、その人たちが悪いんだではなくて。

それは、私たち、差別する側が、自己責任で語ってはいけない、自己責任を否定するような思想を持たなければならないというふうに私は思いました。教科書無償運動の話として、被差別部落の方たちが教科書を買えなかった。社会的に問題があった。それを教科書の無償化運動することによって、周りの人たちがそれを支えて、結果的に、その今全ての国民が教科書を無償で寄付されることになった。やはり、それは、その当事者だけじゃなくて、その周り、自分たちの問題として一緒に関わることによって、そういった大きな社会変革をしたという事実があったということです。ですので、私たちはその当事者の問題とか意味で捉えるんじゃないじゃなくて、自己責任論で捉えるんじゃないじゃなくて、私たち自身の問題として捉えていく意識が、今後必要でないかなと思います。

**香川** 先ほどのご意見、つながるんだろうと思いますが、「生きやすさはつくれる」と重なっているんですが、いろいろな人権課題あるじゃないですか、部落問題もそうですし、障害者の問題でもそうですし、それって、どこに課題があるのかっていうことなんですけど、観音寺市は「課題は環境である」と考えています。環境っていうのは周り、人間も含めてということです。例えば、足の不自由な方が車椅子を使っていると、ここのホールまで来て、そこから仮にエベーターなかったら上がれませんよね。その場合、障害は何かと言うと階段です。聴こえの不自由な方が、文字支援がない。そのために、手話での支援があったら参加できます。そういったことがないっていうことが障害です。障害は環境にあり、部落問題でも、部落は実際にそこにあるのかっていうと、実際にはなくって、差別する人がおるから作られているんです。差別する人がいなかったら、被差別部落ってない。例えば被差別部落があるんだったら、じゃあ加差別部落があるのかっていうとないですよ。でも差別する人がいる、その中で被差別部落って作られているんですね。周りや環境が課題を作っている。環境は変われば課題が解決に向かっていくと、我々は考えて取り組もうとしています。南都銀行さんの取り組みも環境を変えよう。自分たちの環境を変えよう。意識を変えよう。そうされて取り

組まれている。私は素晴らしいなというふうに思いました。「まだまだわからないところもあるけど」というフォローもありましたが、そうやって全てが一気に解決するわけではなく、我々の足元に見えている小さな課題を、我々の自分の課題と捉えて対峙していく。そのためにどんなことができるのかということを取り組んでいくことが大事ではないかなと思っています。観音寺市は、自分たちに目を向けて、1歩ずつ周りのマイノリティの方と手を取りながら改善できるようにしていきたい。

**奈良** 中学校に勤務しています。私も最近、生徒を前にしてよく気をつけていることは、奈良県の広報誌の中にアンコンシャスバイスという言葉がありまして、自分の心の中とか、考えの中に偏見がないのか。もう1回自分の行動とか、自分の言葉を見直しましょうっていうふうに人に言われたことがある。逆に「あなただけの人権守ってるんですよ」というのを、自分自身を研修積みながら、その姿勢を見せていたら、生徒も感じてくれて、生徒も自信つけてくれるんじゃないかなって思いながら過ごしてる部分もあります。私は2日間運営に携わっていたのですが、全く会場にはいませんでした。というのは、奈良チャレンジドの生徒と一緒に「こちらが会場です」「こちらが小学校です」というふうに、案内していました。生徒から学ぶことって、いっぱいありました。人が来ない間にいろんなことを教えてくれました。「先生もこの2日間、あなたたちからいろんなこと学びましたよ。ありがとうございました」と素直にいました。

#### IV まとめ

香川の報告の中では、この「しゃべり場」という枠組みの中で当事者と市民をつなぐこと、あるいは出会いを通して課題認識を広げようとしている取り組みが報告されました。LGBTQ+のこのみならず、その「しゃべり場」という枠を使って様々な人権課題について出会う場として位置付けていこうということも話されていました。フローからは、行政だけでなく学校教育とつながった取り組みにしていくことの重要性があるのではないか。「しゃべり場」の中で出され

たことを、次のステージにどうつなげていくのか、対等な関係性の中で、行政・学校、地域企業が差別の解消を実現するために、それぞれの立場で何ができるのか、何をすべきなのかをつながりながら論議していくことが求められています。

大阪からの報告では、ムラの産業として食肉産業があるが、それは同時に差別される場所でもある。子どもたちが親の仕事を言いたがらないところを出発点として言いたくないのではなく、言えないのは差別される可能性があるから、ということに立って、学校と連携して部落問題学習に取り組む報告がなされました。また、自分たちの地域のみならず、いろんな人たちを巻き込む形でまちづくりを進めることも発信していただきました。フローから、大阪からの補足の説明の中で、当事者が語るということは、今もなお差別が厳然とあるという事実と対峙させられるということである、という話がありました。それだけの思いをしいて、出会いの場を作ってもらった後をどうしていくのか、差別を解消していく力にどうつなげていくのか、私たち一人ひとりが今一度自分に問い直す必要があるのではないのでしょうか。1日目の総括の中で、大阪の方が発言されました。食肉のことについて、部落問題学習として取り組んでいるが、子どもたちの中に差別はないのかと問われた時に、食肉業に対する差別意識が出てきた。「俺はそこ嫌いやねん。だって、牛殺しているやん」これだけ取り組んできて、まだ差別するんじゃないかと思ったら、地域の人から差別意識は出てきてからが勝負や、と言われた。悲観するのではなく、次のアプローチを考えていくこと、そこに差別があるという現実に対して何をすべきなのかを考えて、取り組みにつなげていくことの重要性が語られました。

続けて、奈良の方もおっしゃいました。取り組んだことでマイナスになったとしたら、またそこから考えていくことが大切なのではないか、真摯に向き合い、そこからの反省を元に、次の取り組みに手が出ていくことの素晴らしさを会場で確認しました。

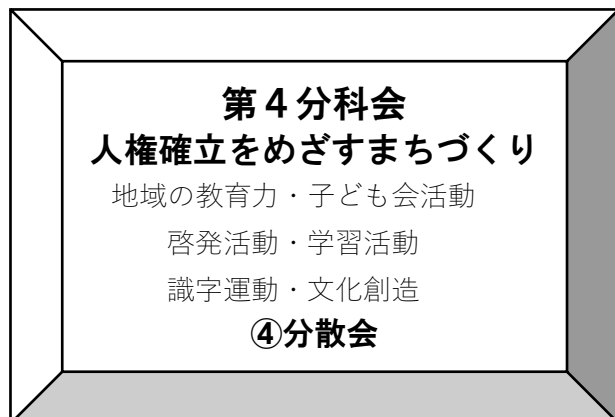
香川の方がおっしゃいました。LGBTQ+の講演会をした時に、子どもが「なんでこんな講演

会をするんやろうな、  
そんなことしなくても生きられる社会が当たり  
前やのに」と話していた。改めてあらゆる人権課  
題に対する差別をなくす取り組みが求められて  
いることも確認しました。

大阪の方からは、一緒に課題解決のために取り  
組みを作っていく人が増えないと差別をなくせ  
ないのではないかと。今一度自分がやらなければな  
らないことは何なのか、自分に問い直す必要があり  
ます。

2日目の報告1本目の兵庫からは、働きやすい  
環境をどう作っていくのか、立場に関係なく、働  
く人たちの働きやすさを作っていく企業の取り  
組みが報告されました。フロアーからは、働きや  
すさとは制度、仕組みだけではなく、意識の部分  
を形づくっていくことが重要なのではないかと  
言っていました。マジョリティー側のマイ  
クマイグレーションを十分に認識しながら、様々  
な立場にある人たちにとっての働きやすさを作  
り出していくことが求められています。

奈良からの報告では、多様な人材の活躍をめざ  
して、障害者雇用の取り組みを進める中で、サポ  
ートする人、サポートしてもらう人ということでは  
なく、互いにとって成長していける関係性にな  
っているということが報告されました。フロアー  
からは、過去の就職差別事件をどう総括して現在  
の取り組みにつながってきたのかということが  
出されました。間違ったことにしっかりと会社と  
して向き合って、そこの反省を元に舵を切ってきた。  
その道筋自体にこそ、反差別の社会の実現につ  
ながっていく学びがたくさんあるのではないかと  
いうことを確認しました。



## I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。

また討議の柱の確認も行い、報告・討議に入った。

## II 報告及び質疑討論の概要

—報告⑮—

オガリ「しきじわいのち」～仲間・地域とともに  
えがく未来～ (大阪府人連)

—主な質疑と意見—

**大分** 文字の読み書きの練習から自分のこと綴  
る活動に変わったのは、何をきっかけに、どのよ  
うに変わっていったのか。

**報告者** 自分の目の前、足元にある事実を書くこ  
とで、本人が体感した今がしっかりと具現化して  
いく喜びを本人とともに味わっていたように思  
う。愚痴や感情もすべて拾い文字に記していく。  
言いたいことがいっぱい聞いて聞いてと湧き  
上がる思いがきっかけであったように思う。自分  
のことを分かってもらうことが、人間の一番深い  
ところにある欲求なのではないかと考えた。

**奈良県** 報告者が識字に関わってきた経緯、その  
熱意はどこから生まれたのか。

**報告者** 自分の生き方につながった。家族の結婚  
のこと、父親が学校に行けず文字を書いたり読ん  
だりする場面がなかったこと、亡くなってから川  
柳等を綴じた冊子が見つかったことを振り返り、  
きっと自分の手で自分のことを書きたかったに  
違いないと考えた。

**大分県** この取り組みを解放新聞で知り、記事を題  
材に子どもに紹介したところ、手紙を書き返信が  
きた。心のこもった本当の字だと思った。返事  
もらった子どもはどんどん変わっていった。いじ  
わるをしなくなった子ども。自分のしんどさを言  
えた子ども。なぜ、子どもがそこまで変わったの  
か、子どもたちは返事をくれた方に「憧れ」を抱  
いていた。これが子どもの本質だと思った。

**福岡** 「ひらがなにっき」を学びに活用した。ど  
のページにも思いやドラマがある。子どもたちが  
自分の励みにしている。しかし今日の報告を聞いて、  
まだ思いを完全に汲み取れていない自分がいて  
指導していることに気付いた。もっと深く学び  
直してこれからの課題にしたい。

**報告者** クラスの中に、勉強がわからない、学校  
に来れない子どもたちにどう寄り添い、学びを保  
障していくのか、これこそが私たちが識字を通し

た学びだと感じた。

**報告者** 小学校の時、本の裏に名前を書いてくれる人がいなかった。低学年では道具に名前を書くのは親。でも家族はみんな書けなかったから、見様見真似で自分で書いた。学校に行くと、友だちが家の人に書いてもらった名前を見せあいつこしていた。隣の子は大人の字がかっこよく教科書の裏に書かれていて見せてくる。思わず自分の物を手で隠した。なぜこんな字を自分で書かないといけないのか、なぜ自分がこんなに悲しい目にあわないといけないのかと思った。どこかの大会でこの話をしたところ、母が「こんな悲しい思いをさせてしまっていた」と泣いた。その後、母は私の名前を何回も何回も練習していた。

**報告者** オガリはそれを見て、自分たちもやりたいと先生に言ったのが取組みのきっかけ。何回やっても何回練習してもできなかつたり、どうしたらいいかと悩んだりした。今日出来ても、次の日はできないことも、みなさんにもっと部落問題を知ってほしい。

#### —報告⑩—

「識字・水平社100年宣言」を作ろうに取り組んで  
(大阪市人教)

#### —主な質疑と意見—

**滋賀** 現在、識字学級に三度目としていかれているが、行こうと思われた理由は？

**報告者** 恩返しがしたいと思った。夜に行くことに苦労はあるが、行くといい出会いがある。若い人にも知ってほしくて1年ずつ体験してもらった。

**大分** 報告者が学習者から学ばれたことは？

**報告者** 差別と闘う人が市民の中にいることを実感した。

**大分** 部落差別に若い記者が熱心に取組まれたきっかけは何だったのか。

**報告者** 破戒を見て衝撃を受けたとのこと。

**大阪府** 「差別をなくしていく子どもたちにしたい」この思いで識字学級へ子どもたちを連れて行った。あたたかい雰囲気の中で生徒さんに接する先生のやりとりが心に残っている。人と人とのつながりを大切にされていた。

**報告者** 季節の変わり目を一緒に味わう時間や

行事、イベントを大切にしている。人数は5人になったが、続けていきたい。識字学級自体にはお金がおりない。コーディネーターにお金を与えられ、それを活動費にあてている。なるべく学習者にお金を払ってもらわないように配慮している。奈良県 水平社100年宣言を学習者はどのように捉えていたのか。中身の意義、どんなところに心を動かされていたのか。

**報告者** 現在実践中で色々なアイデアをいただきたい。水平社ができたとき、創始者や被差別部落の全国各地の人々の想いに触れてもらいたいという思いをもっている。おかしいと感じることや悲しみや憤りを、社会にどうアプローチしていくのか。思いをどれだけ伝えられるかは今後の課題でもある。

**奈良** 水平社宣言の取組みは大阪市としての取組み？

**報告者** もともとは大阪府での取組。メッセージは力のあるものなので、今後教材化する等、形にするのがいいと思う。しかし、自分ひとりの力ではなかなか進められない。この報告を機会に色々なつながりから進められると思うのだが、「仕事だからやる。言われたからやる」は何か違うのではないかと思う。そのようなしめつけから解放され、もっと若手が賛同してくれないかという思いがある。

**大阪** 自分自身がおかしいと感じた時に声をあげられること、行動することが大切であると思う。その為に学ぶことが大事で、今回の水平社宣言に書かれていることが参考になりそう。もっとくわしく知りたい、報告者が共感されたことを知りたい。それが怒りとして頑張れる力になると思う。**報告者** 障害があり、そのことと家庭の事情から学校に行けなかった人がいる。一生懸命文字を学ぼうと思っている人がいる。「優しく、丁寧に教えてくれない先生が頭にくる。ここにくると、ゆっくり安心して学べる。」

**福岡** わたしたち一人一人の問題という認識が大切。国民一人一人の人権宣言につなげていくことが必要なのではないか。同和教育で培ってきた力を仲間と一緒に育てていかなければならない。連帯をつくるためには「自分を知ること」が大切

だと思う。さらに変わることの大切さ、学びをどう実践に結び付けていくか、実践せねば変わらない。お互いを知り合っていない今の世の中に向けて何ができるか。

**奈良** 一人一人が水平社宣言をどうとらえているのか。人間の尊厳を徹底して傷つける差別と闘うために水平社宣言を生んだ。「こんな差別の中で生きている。この世は生きる値打ちがない」と思われる差別の実態。「ひとつのつながりから、社会の変化が生まれる」他人とのつながりの力強さ、人間を尊厳されるものとして立ち上がろうとする力と対比して、家庭訪問ができないコロナ禍やリモートだけでつながる人間関係に課題がある。

**滋賀** 今まで事実を知らない。見ようとしていなかった自分がいたのではないか。「知らなかったから」で済ましてはいけない生き方をしたいと改めて思えた。差別から自分を取り戻した生き方を未来にどうつなげていくか、これが大切なのではないかと思う。

—1日目総括討論—

**長崎** 「豊かな学びとは、豊かな人生とは何か。私たちはなぜ学び、その学びはどんな未来につながっていくのか。

**兵庫** 識字学級の取組みが今日の報告でグッと身近な課題になった。自分とは遠い社会問題のように思っている課題が自分につながるタイミングは、人それぞれだと思うが、ないと思っていることがあると実感できる感覚を今の若い先生たちにももっとつなげていきたいと思った。

**奈良** この地に移り住んで水平社博物館に行くことを躊躇していた自分がいた。それは、知ること自身の中になかった差別心が芽生えるのではないかという気持ちがあった。自身の故郷である福島県の人権学習を調べていくことにするとハッおさせられる発見があった。被差別部落の実態がないこと、人と比較することでしか分かり得ない「自分」は一体何なのであろうか、見えなければならぬとするのか。畏れずに知ることは大切。知った後、比較した後、優劣や上下をつけることが差別なのだと思う。

**大分** オープニングでの水平社宣言に込められ

た思いに胸が熱くなり、同時に胸が張り裂けそうになる思いがした。全国から集まった人々が生きてきた中でどれほどの思いを抱えてここに集まってきたのか、自分が家族に対して抱えていた思い、自分自身の中にある差別心を一枚ずつはぎとることが、心の苦しさを解放するように思える。

**大阪** 脳性まひの子どもの保護者と交換日記を続けていた若い頃、先輩に「ちゃうやろ」と怒られた。母親が文字が書けないという事実気づいておらず、日記を続けていた。人とのつながりは、周りの人のおかしさに気づけているかどうか。そしてそれを「ちゃうやろ」と言える関係性。これによって、自分の生き方が変わるのだと思う。

—報告⑭—

「ムラ」の文化研究部会 40年間のあゆみ  
(福岡県人教)

—主な質疑と意見—

**福岡** 教材作りについて、干拓に関する教材は作成しているのか。

**報告者** 堤防が道になっているところがあり、そこを歩くことで様々なことに気付く授業をやっている。

ムラに込めた思いをもう少し教えてほしい。

**報告者** 解放子供会に参加し、父母の思いを聞いてきた。日常の語らいの中で温かな人間らしさを感じてきた。それらの温かみを継承する意識でムラとつけた。

**大阪** 大阪はリバティもなくなった。活動財源はどうしているのか。

**報告者** 人権・同和教育研究会3つの部会があり、会費、市の補助金、特別会費で賄っている。

**大阪** 教材を全国に発信してほしい。

**報告者** 今のところ考えていない。依頼があれば手渡しで。

**奈良** 社会教育、学校教育が密接に関わる熱い取り組みをされていることに学びがあった。村の人や子どもたちはどんな風を感じているのか。これらの熱量が相手にプレッシャーを与えることもある。

**報告者** 地域の運動団体との情報交換は進めている。教材を通して、子ども同士がつながれるき



っかけになった。

**大分** 授業の中で大切にしたいのは、リアリティと何を伝えたいかを明確にもつことであると思っている。遠いようで近いものを教材として、フィールドワーク等の身近な授業形態を作ることによって深い学びにつながっている。それを40年も続けられていることに敬意をもつ。

**福岡** 10年前人権同和教育担当になった。はじめはわからなかったが段々大事なことだと実感してきた。他の先生に伝えていきたいと思うようになった。ムラの文化研究会も教職員に周知してきた。最近では地元のことを知らない教員が増えてきている。子どもに教えるためには、自ら学ぶことが必要だと伝えている。

**大阪** 差別はおかしいと学習し、子どもが気づく。これまでの体験から苦しい思いを繰り返したくない。このことに対しては家庭訪問を繰り返して理解を深め、求めていく。社会や世の中が変わっていかなければいけない。学校教育と社会教育、地域での教育がかみ合って回っていく必要がある。

**千葉** 福田村事件で映画を作られている。福田村事件を教材化して授業をした。子どもたちは、「知らなくて恥ずかしい」と感じた。行政に伝えても「そんなこと他でもあったでしょ」と聞いてもらえない。加害の歴史を受け入れる勇気が必要になる。差別をしていた事実を受け入れる勇気が必要。

#### —報告⑬—

**個性豊かに アートで発信～しょうがいのある人の創造性から考える個人の尊厳～**

(奈良県人教)

#### —主な質疑と意見—

**大分** 「仕事に人を当てはめるのではなく、人から仕事をつくる」この発想はどのように生まれたのか。

**報告者** ルーティンのある仕事、身体的・精神的にできない方が多い。同じ場所にいること自体が難しい等、これが仕組みや枠を変えるという考えにつながった。アートの才能がある人でないと入れないわけではない。はじめからアートをしたい人はわずか。楽しく自由な雰囲気を選んで入所下さる方がほとんど。個性を引き出すことで、ア

ト作品制作につながっている。

**兵庫** 人権についての学びをもう少し説明してほしい。

**報告者** アート作品の販売を通して、障害がある人自身の尊厳。その人たちが発する言葉や作った作品はその人たちの一部であるという視点。表現を知った人が、作品を通してその奥にある作者に触れる体験、媒介物の価値、人とつながることへの価値を見出す。

**奈良** 昔から存じ上げていた。更に活動が深化されていることにうれしく喜びを感じた。将来どのように生きていくのか、親がいなくなった後などを含め深刻な課題。将来の展望は？

**報告者** 親御さんやご本人の高齢化、総数の増加、細分化された障害者支援分野、これらの課題から福祉の制度を超えた横の連携が解決の要になるのではないかと考えている。見えない差別とは少し違う視点で、制度や環境はあるが、地域等の人とのつながりがあるかどうか、これが福祉分野での課題だった。「互いの声を認め合える社会づくりのために」わたしたちができること、参加者共有の課題。

**奈良** 「自分のことを知ってもらいたい」誰にでもある人間本来の欲求。これを、どのように汲み取っていけるかを社会が考え連携していくことが大切。

( ) 色々な人たちを知ることが、まず大切だと感じた。伝える側にある私が学ばなくてはならないと改めて実感した。学校教育で学んだことが家庭で受け入れられてもらえない現実も報告から見えてきた。

**大阪** 自傷行為、自死願望のある子どもが手首の傷を見せてくれた。絶対に自分で死なないでと約束。それだけはお願ひした。また一緒に話したいと思った。たんぼぼで乗り越えたことはないか？

**報告者** 専門家に回してしまいがちな課題を、よく人としての付き合いとして大切にされていることに感銘を受けた。一人一人にしっかり寄り添っているが、我々が常にこれは自問すべきこと。すぐに解決できるアドバイスはないように思える。弱いながらも支え合って生きるのが人間。寄り添い、一緒に考え悩むことが一番正しいことな

のでは。

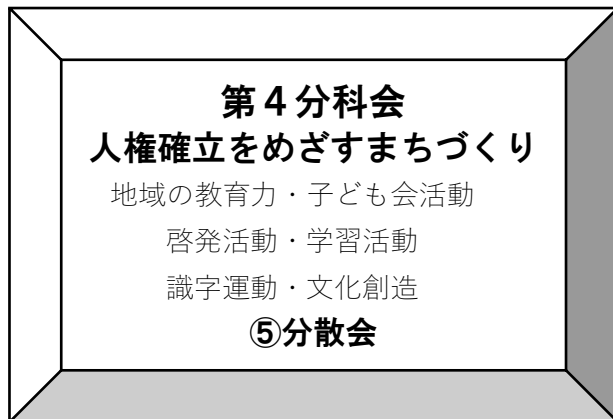
#### —2日目総括討論—

**奈良** 全国水平社100年、それぞれの立場で考えて集まっていた。実践報告の共有、差別をなくしたいという1点にこだわって集まってきた人々。全国でつながっていかねばならない。差別の現実がある。変えていかねばならない。このつながりを実感し、明日に向かっていきたい。

**大阪** 中学校で進めてきた部落解放学習。子どもを変えていくことが、社会を変えることにつながる。と思っていたが視野が広がった。一緒にいるとわからなくても、外から見るとわかることがある。という発言にハッと気づかされた。自分を語ること、自分の水平社宣言を考える。差別の現実学ぶこととは、自分としてできることをがんばっていくこと。

**奈良** 全同教で鍛えられ、毎年楽しみにしていた。識字は命、人権教育は命の教育だと今回の報告会でも改めて感じた。

人権の視点をもつこと、できたつながりを学び継承すること、ネットワークをつくること、知らなかったことは恥ずかしくない、知ろうとしないことが恥ずかしいこと。



#### I はじめに (省略)

#### II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—⑱ 「プラスの出会い」からはじめる人権文化のまちづくり (大阪府人連)  
—主な質疑と意見—

**奈良** どの事業をNPOがしているのか。

**千葉** 地域の課題を具体的に教えて欲しい。その中で、レポートIVの④「多世代交流拠点施設づくり」は両施設の運営を担ってきたNPOにとってこ

れまで以上に活動を広げるチャンスになるのではないか」をどのように位置づけられているのか。また、「プラスの出会い」として、どのようなフィールドワークのあり方をNPOとして描かれているのか。

**報告者** 人権文化センターの「人権資料室の運営」「人権啓発研修事業」をNPOが担っている。地域の課題としては、市全体の市営住宅の半分以上が地域にある。高齢化が進み、他地域からの流入による関係の希薄化によって、コミュニティバランスが崩壊している。また、子どもの数も減少している。もともとの地域課題としての部落差別による学力の低さは、現在、団地の仕組みによって低所得と関連する学力の低さやしんどさを抱えさせられている子どもたちが多くなっている現状がある。部落差別に起因したしんどさとは違う家庭や子どもたちが増え、そこに対する支援をどうしていくかが課題となっている。運動によって公共施設がたくさん建設されてきたことや地域の中での活動の手法などをフィールドワークで伝え、地元に戻ってもらうことにより、地域で実現していってもらえるように取り組んでいる。

**福岡** 運動体が法人を立ち上げ、事業を引き受けているのか。独自に活動しているのか。

**報告者** 運動体があり、NPO法人ができた。解放運動の中で培ってきたものを広く人権というテーマで活動していこうとNPOで取り組んでいる。

**千葉** 報告者はプラスの出会いを求められている。それは報告者自身の体験があったからと想像するが、報告者自身はどのような出会いをし、プラスの出会いとして評価されているのか。

**福岡** 地域の子どもの活動は、どのようなものがあるのか。校区の学校では、地域の解放運動をどのように扱われているのか。

**報告者** この地域の出身ではあるが、自分の経験の中でプラスの出会いは記憶にない。他で学んだプレーパークなどに感銘を受け、自分の地域でも活かしたいと思った。今は、解放子ども会はない。どろんこ子ども会が解放子ども会後に続いたが、学童保育的なことが役割の中心となっている。過去には実施していた狭山事件の学習などもし

ていない。また、学校も自分たちが子どもの頃は、ほぼ 100%地域の子どもたちだったが、今は団地の関係もあり、誰がどこの出身かわからなくなっている。学校の授業でも、部落問題を取り上げて学習することが少なくなっている。その中で年一回、学校に行って活動するにあたっての思いなどを伝えている。

**佐賀** おとな向けの同和教育を仕事にしている。マイナスの出会いをした人が多いため、部落問題と出会い直してもらうために講座をしている。プラスに会い直すことを報告者はどのように考えられているか教えて欲しい。

**報告者** 市が以前、人権問題に関する市民アンケートを実施したときに、地域の人との付き合いが多いほど差別意識や偏見が少ないという数字がわかってきた。NPO として大事にしているプラスの出会いとつながる。

**鹿児島** マイナスやプラスを報告者は具体的にどのように捉えているのか。

**報告者** フィールドワークの中では、部落の実態だけを知ってもらうのではなく、現状をよくするために取り組んできた内容などを伝えるようにしている。

**兵庫** 部落に生まれ育ったが、きちんと伝えられ、教えられたわけではない。その中で、差別事件をとおして運動が立ち上がった。解放学級に取り組む中で、学習をとおして、子どもたち自身が変わり、先生たちも家庭訪問などで事実を知ることによって変わってきた。

**千葉** 最初は、被差別体験を話してくれなかった地域の人がともに活動する中で、自分を捉え直し、伝えてくれるようになった。地域の子どもたちにとっては、自分の祖父母の体験や歴史を知る中でプラスの出会いとして今の現実を知っていくことにもつながっている。

**奈良** 自分たちの世代は、補充学級という形で、部落問題を自然と学んでいくような中にいた。法切れ後、活動がなくなり、補充学級があったときは毎週来てくれていた先生たちもほとんど地域に来なくなった。誰が地域の子かわからないと報告にもあったが、特に地域から出て生活している子どもたちは立場を自覚していない。その子ども

たちも、学校の部落問題学習も受けているが他人事になってしまっている。結婚などで差別を受け、立場を自覚し、下を向いてしまう現実がある。部落差別の現実を抜きにプラスの出会いとは言えない。運動体が一方的に伝えるわけにもいかず、誰が伝えていくのか、子どもたちに立場をどう自覚させていくか、また、地域から出ればわからない、そっとしておいて欲しいという親へのアプローチをどうしていくかが課題になっている。

**報告者** 学校の授業に行っても、部落差別という言葉さえ知らなかったりする現実がある。自分たちも保護者を飛び越えて伝えるわけにもいかず、同じような課題がある。保護者は、学校の授業参観や運動会、行事には積極的に参加するが、子ども会に呼びかけても来てくれない。子どもたちはおとなになるにつれて、まわりからの話で立場を知っていくという状況がある。

## 報告 2-⑳ 誰のために語る

(千葉県同教)

### —主な質疑と意見—

**千葉** レポートの K さんの息子さんの A さんの発言はいつ頃の出来事なのか。お父さんである K さんが運動することに対する A さんの意識に変化はあったのか。

**報告者** 2 年前の 2 月の出来事。一時期は会っても会話が成立しないような状態の時期もあった。親族や K さんの娘さんが関わってくれたこともあって、A さん自身が少しずつ変化をしていった。現在、千葉では私が K さんとともに講演をしている。それは、K さん自身の「自分の家族に起こっている問題は自分たちだけの問題ではない。どこでも起こり得る問題だから語りたい」という思いに応えたいと始めた。私自身は、この活動が A さんに届くことで、K さんの思いを A さんに伝えたいと一緒にしている。

**兵庫** K さんは解放運動に取り組んでいても、それが息子である A さんには引き継がれていないという部分をどのように捉えられているか。私自身も解放運動をしながら子育てをしてきた。子どもたちは反対せず、応援してくれているが、子どもの生活に支障を来すと思うときは、立場を明かすことに戸惑う自分がある。K さんの思いも、

Aさんの思いもわかるからこそ、そこを突き詰めていく必要があるのではないか。

**報告者** Kさん自身は、子どもたちには立場を伝えているが、孫には伝わっていない。Kさんの娘さんは同和教育がある学校に進学をしたが、Aさんが進学したのは同和教育がない学校だった。そのあたりも大きいかもしれないとKさんがよく言う。地元の部落研の活動に親子で参加しているケースもあり、それもひとつの展望として捉えている。子どものために運動しているのに、支障を来すかもしれないと考えなくてはいけないところに差別の現実がある。他者の気持ちを考えられる人を増やしていくことが大切だと思っている。

**奈良** 子どもたちが部落差別といつ会おうかわからない。差別に打ち勝つ気持ちはどのようなことで生み出されるのか。そこには報告にあった「相手を思う気持ち」は欠くことができないと思いつつ聞いた。この大会に参加した一人として、自分にできることを模索したい。

**大阪** 報告者自身が同推教員となり、学んできたことや得たものを自身の学校ではどのように教職員や生徒に広めているのか。

**報告者** 報告をした自分自身の話は生徒に話している。それを語っていく勇気をもたらしたのは、地域に入れた恩恵だと思っている。教職員にも生徒にも、同和教育に関してはKさんなどを講師に招き、部落差別の現実から学んでもらうことを大事にしている。自分の生きてきた中で視点を変え、捉え直していくきっかけにして欲しいと思い活動している。

#### —1 日目総括討論—

**協力者** 部落問題とのプラスやマイナスの出会いというキーワードが報告や討議の中で出された。そのことを踏まえ、自分は部落問題とどのように出会い、どう捉えているのか。自分の前にはどのような部落差別の現実があり、その現実とどのように向き合おうとしているのか。自分事にするとはどういうことなのか。また、子どもたちに立場をどう自覚させるかについても討議の中で出された。被差別の立場の自覚に限らずに、加差別の立場の自覚という点で、誰とどのような関係をつくらうとしているのか。何を差し出し、語り

合うことで関係をつくるのか。実践をとおして、議論を深めたい。

**佐賀** 隣保館で働き始め、同僚からの差別的な発言によって、部落問題とマイナスの出会いをした。自分に知識がなかったから返せなかったし、誰にも言えなかった。指導員になって初めて打ち明けることになった。子どもには伝えないという親の立場は最大限尊重すべきだと思うが、でも、部落差別と出会ったときにきちんと知らなければ闘えない。思わぬところでアウトイングされる前にといいながら模索している。何かあったときに子どもたちに頼ってもらえる自分でありたい。

**鹿児島** 人権担当となり初めて部落問題を知り、それまでは他人事にしていた自分に気づいた。先輩教員からの後押しで、親と語ることをとおして、その意味を実感してきた。子どもたちが自分の立場を知るとはどういうことか考えてきた。差別の現実を直視できていない自分がいる。一緒に学習していた子どもたちの親から「いつか話そうと思っている。でも、いつ言うか、なんて言うかわからん」と聞いただけで止まっている。その子どもたちは高校を卒業し社会に出る。このままでいいのだろうかと考えている。

**奈良** 語るというキーワードが報告にあったが、語ることとともに感じることも大切である。差別はダメだと言っても、ダメだと感じられることが大事で、その感受性を教育の中でいかに育むか。福岡 同和教育は学校で完結するものではない。人口の半数が地域で、出身の同級生がたくさんいる中で育った。教員になって、30歳を過ぎたときに、友だちから「地区出身の友だちが結婚を反対され、結婚できなくなった」と連絡を受けた。その友だちは「親の世代は同和教育を受けていない。でも結婚相手は受けているはずなのにおかしい」と憤る姿を見て、自分は怒りを持ってなかった。しかし、友だちの姿からこれが学校の同和教育でめざす姿だと教えられて気がした。親が伝えていくことは難しいからこそ、学校で学習の機会を保障していく必要がある。その中で親に語ってもらう。橋渡しの役割を担っていかなくてはいけない。プラス・マイナスということが話題になったが、差別の厳しさだけしか伝えておらず、地域の文化や

よさを伝えきれていなかったことをマイナスの出会いと捉えてきた。地域の人から「オレらにとってはマイナスもプラスもない。先生たちが勝手に決めているだけだ」と言われたことを思い出した。現実だけではなく、社会を変えてきたことなど両面で伝えていくことが大切だと思っている。

**奈良** 保育所で10年ほど前まで働いていた。解放保育という看板を掲げ、差別に打ち勝つ子どもを育てるというスローガンのもと、0歳児から取り組んできた。「なんで部落の子だけが正しく強く生きやなあかんの。部落の外の子も正しく強く生きてくれやなあかしい」という声から両側から越えることを大事にしてきた。法が失効し20年経過するが、差別の現実を聞き、ショックを受け焦った。これまで以上に、正しく知り、自分のことを語り合わない辛い思いをする人が増える。

**協力者** 部落差別解消推進法が指摘したようにインターネット社会が進んだことによって、これまでは考えられなかったような部落差別の現実が起こっている。だからこそ、その現実とどう向き合い、何をしていくか、会場から実践で重ねていただきたい。

**兵庫** 施策の中で団地ができたときも、表面上だけしか見てもらえず、ねたまれてしまう。なぜ、団地が必要だったのかというあたりまで理解されていない。だからこそ、私たちはきちんと啓発をしていかなくてはいけない。同和教育が人権教育になってから薄くなってしまった。薄くなってしまったところを、学校と連携しながら補っていくしかない。

**兵庫** 自分自身が立場を自覚したのは、学校の無計画な同和教育の中で知らされ、下を向いてしまった。だから、そういう知らせ方ではダメだと思う、子どもには小さいときから「私たちには何の責任もないが日本の中には部落差別があり、その立場に置かれているのが自分たちだ」と話してきた。児童館と学校が一体となり、子どもたちは立場を自覚し、立場宣言をしていった。今、そういう状況が少なくなってきた中で、アウトイングされていってしまうケースがたくさん起きている。私自身がそうだったように周りは知っていても、自分は知らない。教育のあり方を考えて

いかなくてはいけない。プラスイメージは自分の立場を自覚した上で持たなければ意味がない。生活環境は改善されても、一番、言いにくい実態は残っている。それが部落差別の現実であり、そこはなくなっていない、それもわかった上で教育を進めて欲しい。

**千葉** 当事者に体験を語ってもらうことで生徒に何を考えさせたいのか、考え切れていなかった。差別の現実を知ったときに自分はどのようにするのか問われるような時間にしなければいけない。同和教育のあり方を改めて考えたい。

**報告者** 同推教員になったからといって差別をしない人間になったとは思っていない。いつする側になるかわからない自覚を持ち続けたい。それを考えていくことが自分事にしていくことではないかと思っている。

#### —まとめ—

**協力者** 部落差別の現実を解決していくために、どのような動きや取組をしているのか。分科会名にもある「人権のまちづくり」として、すべての人が生きやすい町になっているのか、なっていないとすれば、どこに課題があるのか、その課題を解決するために、誰とどのような関係をつくられば解消されていくのか。討議を深めてもらった。

プラスやマイナスというキーワードが報告や討議の中で出されたが、受けとめる側が差別の現実をどのように受けとめ、感じているかということではないか。

地域の人に問われたことがある。「今日、先生たちは何のために私の話を聞きにきたのか」「自分の体験や厳しい地域の中にある差別の現実を知るために来たのか」「確かに差別も厳しい生活もあった。でも私は先生たちの前にこうして立っている。生きています。生き方こそを学びにきたのではないのか」「それをぜひ掴んで子どもたちの前に立って欲しい」と突き付けてくれた。立場を自覚させることの難しさが討議の中では出された。地域の子どもたちだけの問題、ムラのおとなだけの問題ではなく、まわりの人たちも含めた立場の自覚ができていくのか問われている。

会場からは「部落差別の現実を知ったからには向き合わないといけない。闘うには知識や仲間が

必要だ」「だから自分が動いてつながりをつくり続けている」と重ねてもらった。一人ひとりが何にこだわるのか、その出発点は私たちがつくりようとしている差別をなくしていく関係性にある。そのために、一人ひとりが部落問題をどのように認識しているのか、職場や地域でどのような関係をつくりようとしているのか、改めて問いたい。

### 報告3-⑰生 きづらさに苦しむ人たちと共に ～包摂・共生型の地域社会づくりをめざして～ (奈良県人教)

#### —主な質疑と意見—

**千葉** 解放運動、地元の取組み、教育運動など、どういうものがベースにあるのか。特に行政の姿勢もあわせて教えて欲しい。

**報告者** 行政に勤めていたことから行政職員との関係が良好である。解放運動は長らくないが、地域の中には地域課題を話し合える土台がある。解放運動をしているときに、自分たちだけがすごいと思っていた時期があるが、地域に入ると、いろんな活動をしている人がいることに気づいた。

**奈良** 定期的に活動されている三つの活動に従事されている方と利用されている人の数、財源について教えて欲しい。

**報告者** 「ボーレ」はスタッフが常時5人、利用者が15人。「べいす」は居場所で不定期に来られる方もいるため、年間で登録されている方は15人ほどでスタッフは2人。「べいすくーる」は小学生が5人ほど登録しており、スタッフは2人。

**報告者** 就労支援事業所は公的な障がい者の福祉サービスを財源にしている。それ以外は自転車操業で運営している。

**奈良** この活動を県内にどのように広げようとしているのか。コーディネータ役を引き受け、実践してきたことがあれば教えて欲しい。

**報告者** 広げていくことは考えていない。私たちの取組は少し工夫すれば、どこの団体もできている。それがそれぞれの地域で広がることを望んでいる。働くということに対する価値観が、資本主義の中で効率性や合理性を求められ、そこから外れてしまう人がいるという事実がある。働ける場所の確保を地域の人に協力してもらいながら進めていきたい。気づいた人がいろんな団体

とつながることからしか始まらないと思っている。町内でたくさんの役を引き受けている。その中で話ができる関係をつくり、ともに課題を解決していくネットワークをつくらせている。部落問題においては被差別であっても、他の問題は私たちが変わっていかなくてはいけないところもある。社会福祉協議会が様々な活動をしている。ともにできないことを補いながら活動している。私自身は過去には児童館の職員も務めたが、15年ほど前に児童館が廃止され、閉鎖状態になっていた。私の中に地域の中の拠点をなくしたくないという思いもあったので、つながったNPO法人がその施設を活動の拠点にしてくれている。「べいすくーる」の子どもたちが遊びに行ったりしている。地域の中も多様な人を受け入れ、変わっていかないといけないと思っている。

**兵庫** 自分たちが胸を張ってふるさとを名乗れなかったため、同じ思いはさせたくないと子どもたちと付き合いをしてきた。自分たちが解放運動をし続けることが、解放教育を薄れさせないためにできることのひとつだと思っている。

**奈良** 報告者と同じ町内の幼稚園で勤めている。親や子どものニーズも変わってきているが、子どもが安心して暮らせる居場所が地域の中にあることは大事なことだと思っている。寄り添いながらできることを一緒にしていきたい。

**福岡** 行政職員の方が「学校と行政はお互いに専門性がある。でもグレーゾーンがある。そこに踏み込んでいかないとネットワークができない」と教えてくれた。その方の部署が変わられたときに、次の学校で再会し、ある家庭のおばあちゃんの支援を口実に子どもの支援をしてくれた。窓口を行政職員の方が担ってくれたからこそ、支援のネットワークが広がることを学んだ。その役割を担えたらと関係づくりを進めている。そういった役割を担う人が何人もいるのか、すべて引き受けているのか教えて欲しい。

**報告者** コーディネータという役割で動いているわけではない。役割を担っている人がいるわけでもない。ただ、どのような支援が必要か情報がないと支援ができないからこそ、情報交換をできる関係性をつくることを大事にしている。

報告4-⑩ 未来へつなぐ和太鼓  
(高知県人教)

—主な質疑と意見—

**鹿児島** 活動する上での課題、工夫しているところ、体験や経験から大事にしていることなどを教えて欲しい。太鼓屋への見学の際に、どのような事前学習をされたか教えて欲しい。

**奈良** 先生をどのように巻き込んでいるのか。

**報告者** 働いている層のため平日にはできない。イベントなどの準備が難しい。幸いにも自分自身が動けるような仕事に就いている、そのような環境はつくってることができた。事前学習はすべきだった。普段の活動の中で、なぜ太鼓をしているのかということは話をしている。学校とは、保育園も含め、いい関係をつくれている。年間一回は地域行事に参加するように体制をとっている。その中で、先生たちと色々な話をしている。まずは地域に来てもらうということは、これまでの活動の中で確立してきた。

**奈良** 不登校の子どもは、どのように和太鼓を知り、参加したのか。

**報告者** ケースにより違うが、学校で全校生徒にチラシを配布してもらっている。その中で興味を持った子が来てくれている。太鼓で自信をつけさせたいと先生が連れてきてくれる場合もある。その中で、子どもの変化や様子を学校が聞かせてくれたりする。イベントなどで興味や関心を示してくれている子がいたら、声かけをしている。

**奈良** 既存の組織の名称を変更し、継続させていくことの実践に学びたい。

**千葉** 活動に参加した子どもたちの変容を教えてください。

**報告者** 不登校の子どもがずっと参加してくれていて、地域に対してどう思っているかわからなかった。地域のことが好きですかというアンケートに「もちろん」と書いたことを先生が教えてくれた。それは、太鼓という自分をアピールできるものがあると気づけたからだと思っている。「これからもこの地域に住み続けたい」と話してくれたことも参加し続けてきた結果だと思っている。

**兵庫** 法切れ以降、差別がなくなったかのように、取組も薄れていった。地域の伝統文化に対して、先生たちも学習を進めるが、なぜ、それをするの

か教えられていない。あるとき、地域の伝統文化について調べる宿題が出されたときに、一人の子が私のところに聞きに来た。伝統文化を伝えようと思うと、部落問題抜きには語れない。子どもたちに部落問題を学習したか聞いても「知らない」と返ってくる。学校が取り組んでいないのに、聞きに来させる学校の姿勢に驚いた。その子とは別の子はインターネットで調べていることもわかった。そういったことを踏まえて、取り組んで欲しいと学校に対しては強く思う。

### Ⅲ 総括討論

**協力者** 差別の現実を自分の問題としてどう捉えたのか。その問題をクリアするために、誰とどのような関係をつくってきたのか。社会を変革していくためにどのような具体的な行動をとっていくのか。実践をもって届けていただきたい。

**鹿児島** 一緒に学習している子どもたちの立場の自覚が自分にとっては課題だった。既に学校は異動しているが、関わり続けることと自分の問題として学習を続けたい。学校の中で、同僚とどのように学んでいくか悩みもあるが、率直な思いを語り合える関係をつくり、同時に自分が学んだあたたかさや安心できる居場所のつながりは、様々な課題に直面している子どもたちや保護者、先生たちにも通じることを伝えていきたい。

**奈良** 人権確立をめざすまちづくりが、言葉だけで終わっている虚しさを感じる。道徳教育は教科になったが、人権教育は教科にさえなっておらず、体系化されていない。実際の教育現場で若い先生からは難しい問題として避けられている。同和教育を一部の人の取組にしてはいけない。

**兵庫** 教員や行政職員になると、同和問題はわかった上で仕事をしなくはいけないと私たち地域の人間と向き合っているように感じる。解放運動をしても差別をなくす人間になれたわけではなく、逃げたいときも怖いときもある。こういう場所だからこそ、自分が思ってきたことを、仲間とどのように克服してきたか、本音で語り合いたい。それは、地元で教員と語り合うときに私自身が大事にしている。

**千葉** 語るという言葉に簡単に集約をしていいのか。どういう思いで何を語るのか、そこがなけ

ればピントがずれてしまう。それを打ち出した上でのレポートや討論があつてしかるべきではないかと思っている。不登校の子に対して居場所を保障していく中で、その居場所にさえ行くことができない子どもたちの支援をしている奈良の報告で学んだことを自分に返したい。

**報告者** いつも悩むのは、ここに来ることさえできない子、家から出られない子はどうするのか。保護者が居場所を探す場合もあるが、まったく保護者が動かないケースもある中で、その子どもたちはどうするのか。居場所づくりをしながらもジレンマに悩んでいる。

**報告者** 語ることは、本音を伝え、本音で聞くことだと思っている。そこで対立しようが、差別的なことが出てこようがわからない。本音が出なければ差別的なことも見えない。その本音が見えたときにその人自身を変えていくことができる。

**佐賀** おとな向けの講演をすると「もう人権のことは聞きたくない」「また同和か」と言われることがある。拒絶反応を示されることもある。上から目線で指導してはいけないことを大事にしている。自分の言葉で伝えないと伝わらない。自分の問題として考えてくれる人を増やせるように啓発を進めたいと思う。

**兵庫** 部落問題を中心に据えた活動の中で、「いじめ問題と同じだ」と気づいてくれた人がいた。いじめ問題だけを学習しても他の問題にはつながっていかないが、部落問題を学習することは他の人権問題へとつながる。地域のまわりの人との関わりは難しいが、まちの人権啓発部会とともに取組を進めることでつながりを持つ。

**奈良** 本音を出すことで討議が深まるよう進めてもらいたい。

**協力者** 語ること、語ることでつながること、つながることで力になること、言葉として使うが、提起していただいたように「自分の何を語っていくのか」という点で、具体的な実践から学び合う場として分科会を進めた。

#### IV まとめ

**協力者** 総括討論で「部落問題をどう思っているか本音を出すことでつながっていきたい」「語ることは具体的にどういうことなのか」と声をあげ

ていただいた。また、部落問題をマイナスからプラスへどう変えていくか、どう発信していくかという提起をもとに、「自分は部落問題や差別の現実とどう出会ったのか、どう捉え、どう向き合おうとしているのか、自分事にするとはどういうことか」ということについて、二日間の討議を重ねていただいた。

差別に対する不安や辛さ、しんどさは、自然に多くの人にわかってもらえるものではない。わかってもらえないからこそ、ときに被差別の当事者が声をあげざるを得ない。しかし、差別を受けたことに対して声をあげれば、自らの立場をカミングアウトすることにもつながる。だからこそ、声をあげられなかったり、我慢を強いられたりすることで、差別の現実を見えなくさせてしまう。想像や推測ではなく、差別の現実や生きづらさと私たちは向き合おうとしているだろうか。差別の現実から深く学び、そこから取組を初めていくことが問われている。

そして、そのような現実があるからこそ、「自分が描いていることや課題として感じていることをクリアするために誰とどんな関係をつくるのか」「何を差し出し語り合うのか」、自らを問う営みこそが、建前から本音へと変えていくことではないだろうか。

また、討議の中では、「社会的立場をどう自覚させていくか」「親にどうアプローチしていくのか」ということについても議論を深めていただいた。子どもに立場を伝えることは、親の思いや考えを尊重しなくてはいけないことはもちろんである。しかし、「今は伝えるつもりはない」という言葉だけを受け止めていないだろうか。そこで、親とどのような話をしていくか、どう向き合っていくかを考えもせず、伝えることを親任せにしないだろうか。

そして、「相手の立場に立つ」「相手を思う気持ち」というキーワードも二日間の討議の中では出された。その意味は、会場からの「自分もがんばらなくてはいけないと思ってきたし、思わされてきた。生きづらさを感じてきた自分が解放運動や様々な人と出会ったことで救われた。『しんどさ』『生きづらさ』を知ったときに、自分と重ねた



ことで、なぜ、そうせざるを得ないのかを考えられた。だから、本人の努力や自己責任ではない、まわりの見方を変えたいとともに、「寄り添い切る」という声で確認したいと思う。

さらに、「部落問題では被差別でも、他の人権問題では自分たちが変わっていかなあかん」という声もあった。被差別・加差別の立場にある自分を差し出し語り合うからこそ、ともに反差別として立っていくことができること、両側から超えるために、差別の現実と自分がどう向き合うか、語り合える関係性やつながりをまちづくりへとどう発展させていくかということ私たち一人ひとりが問われている。

全国水平社創立から 100 年の今、社会に存在している差別とどう向き合っていくのか、被差別・加差別から自らを解放することで、仲間と社会を変えていくことを改めて私たちは受け継いでいかなければならない。気づいた人が声をあげ、つながることで社会を変えてきたからこそ、自分の立つ位置をはっきりさせ、人と人が世代を超えてつながり、ネットワーク化していくことが、人づくり、まちづくりであるということを確認し、分科会の二日間のまとめとしたい。